

環境省自然環境局野生生物課 希少種保全推進室 編

環境省レッドリスト 2020 補遺資料

Addendum: Red List 2020 of Ministry of the Environment, Government of Japan.

はじめに

「環境省レッドリスト 2020 補遺資料」は、令和 2 年 3 月に公表されたレッドリスト 2020 においてカテゴリーが変更された種を対象に、それらの評価理由や生息状況等を簡潔に解説したものです。

すでに刊行されている各分類群のレッドデータブック 2014 と合わせて、絶滅のおそれのある野生生物の保護を進めていくための基礎的な資料として広く活用されることが望まれます。

レッドリスト 2020 の詳細については、以下の web ページを参照してください。

<<http://www.env.go.jp/press/107905.html>>

平成 27 年 9 月に公表したレッドリスト 2015 より、「第 4 次レッドリストの随時見直し」を実施しています。随時見直しにおける評価対象は、「近年の情報から減少が確認され、早急なカテゴリー変更が必要となる種」、あるいは、「新種記載等の分類学的な最新知見に基づき新種の追加や既存掲載種の分離・統合が生じ、早急に評価が必要と判断された種」等です。

また、随時見直しでは、全分類群において定量的要件を用いた絶滅危惧カテゴリーの評価を開始しました。そのため、第 4 次レッドリストまで定量的要件により絶滅危惧カテゴリーを評価 (CR+EN, VU) していた分類群 (貝類、その他無脊椎動物、蘚苔類、藻類、地衣類、菌類) については、随時見直しにより評価した種に限って定量的要件を用いた評価 (CR, EN, VU) が行われており、両評価結果が混在した状態にあります。なお、随時見直しによる評価が実施されない全掲載種についても、令和 2 年度から開始予定の「レッドリスト全体見直し」において定量的要件を用いて再評価される見込みです。

解説内容

環境省レッドリスト 2020 において新たに掲載された 41 種、カテゴリーが変更された 28 種、レッドリストから削除された 5 種について、以下の内容を簡潔に解説

しました。なお、汽水・淡水魚類、藻類については、レッドリスト 2020 において評価した種はありませんでした。

【掲載項目】

- カテゴリー区分 (新旧)
- 分類群名 (目名、科名等)
- 標準和名
- 学名、命名者名、命名年
- カテゴリー判定基準
- 日本における固有性
- 基礎情報
 - 評価種の形態、生態、本来の分布等の基本的な情報等を記載
- 分布域・生息地・個体数の現況
 - 分布域・生息地・個体数等に関する現在の状況を記載
- 随時見直しの評価理由
 - 随時見直しにより評価を行った理由及び種の現状等を記載
- 存続を脅かす要因
- 参考文献
- 執筆者、協力者 (所属)

執筆

執筆はつぎの方々にお願ひし、執筆者名を種ごとの記載の末尾に明記しました。

石井信夫	北野 忠	早瀬善正
先崎理之	丸山宗利	島野智之
竹中 践	岸田泰則	中野隆文
田辺真吾	苅部治紀	日本植物分類学会
大川博志	福田 宏	古木達郎
松井正文	齊藤 匠	大村嘉人
見澤康充	久保弘文	柏谷博之
富永 篤	亀田勇一	糟谷大河
林 正美	近藤高貴	保坂健太郎

(敬称略、掲載順)

レッドリスト見直しの経緯と検討体制

○ 見直しの経緯

野生生物の保全のためには、絶滅のおそれのある種を的確に把握し、一般への理解を広める必要があることから、環境省では、昭和 61 年度より「緊急に保護を要する動植物の種の選定調査」を行った。その結果を踏まえ、動物については平成 3 年に環境省版レッドデータブック「日本の絶滅のおそれのある野生生物－脊椎動物編」及び「日本の絶滅のおそれのある野生生物－無脊椎動物編」を取りまとめた（レッドデータブックとは、レッドリストに基づき生息状況等を取りまとめ編纂した書物である。）。

平成 7 年度には国際自然保護連合（IUCN）で採択された新しいカテゴリー（ランク）の考え方を踏まえて、動物についてはレッドリストの見直し、植物については新たに選定に着手し、動物では①哺乳類 ②鳥類 ③爬虫類 ④両生類 ⑤汽水・淡水魚類 ⑥昆虫類 ⑦貝類 ⑧その他無脊椎動物（クモ形類、甲殻類等）、植物では⑨植物Ⅰ（維管束植物）及び ⑩植物Ⅱ（維管束植物以外：蘚苔類、藻類、地衣類、菌類）の 10 分類群ごとに、平成 9 年度～12 年度にかけて順次レッドリストを公表した（動物については 2 回目、植物については初めての公表）。

また、このレッドリストを元に、分類群ごとのレッドデータブックを平成 12 年度～18 年度に発行した。

平成 14 年度より 2 回目のレッドリストの見直し作業に着手し、平成 18 年 12 月に鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物の 4 分類群、平成 19 年 8 月に残りの哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ（維管束植物）及び植物Ⅱ（維管束植物以外）の 6 分類群のレッドリストを公表した（動物については 3 回目、植物については 2 回目の公表）。

新たにレッドリストに掲載された種や、カテゴリーが変更された種については、現行レッドデータブックの付属説明資料を作成した。

平成 20 年度より 3 回目のレッドリスト見直し作業に着手し、平成 24 年 8 月に汽水・淡水魚類を除く 9 分類群、平成 25 年 2 月に汽水・淡水魚類のレッドリストを公表した（動物については 4 回目、植物については 3 回目の公表）。

また、この第 4 次レッドリストを元に、分類群ごとのレッドデータブックを平成 26 年度に発行した。

平成 27 年度からは、生息状況の悪化等によりカテゴリーの再検討が必要な種については、時期を定めず必要に応じて個別に随時見直しを行うこととしており、第 4 次レッドリストの改訂版として現在までに 4 回見直しを行い公表している（平成 27 年 9 月（レッドリスト 2015）、平成 29 年 3 月（レッドリスト 2017）、平成 30 年 5 月（レッドリスト 2018）、平成

31年1月（レッドリスト2019）。

○検討体制

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会の下に分類群毎に分科会を置いて検討を行った。検討員については以下のとおり。（50音順、◎は座長、所属は令和元年度時点）

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 検討委員

石井 信夫 東京女子大学現代教養学部 教授
◎石井 実 大阪府立大学 名誉教授・学長顧問
岩崎 敬二 奈良大学文学部地理学科 教授
大高 明史 弘前大学教育学部 教授
尾崎 清明 山階鳥類研究所 副所長
角野 康郎 神戸大学 名誉教授
田中 次郎 東京海洋大学 名誉教授
細谷 和海 近畿大学 名誉教授
松井 正文 京都大学 名誉教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 哺乳類分科会

◎石井 信夫 東京女子大学現代教養学部 教授
押田 龍夫 帯広畜産大学環境農学研究部門 教授
佐野 明 三重県総合博物館 主査
中川 元 知床自然大学院大学設立財団 業務執行理事
横畑 泰志 富山大学学術研究院理学系 教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 鳥類分科会

植田 睦之 バードリサーチ 代表
◎尾崎 清明 山階鳥類研究所 副所長
金井 裕 日本野鳥の会 参与
玉田 克巳 北海道立総合研究機構環境・地質研究本部環境科学研究センター 主任主査
永田 尚志 新潟大学佐渡自然共生科学センター 教授
新妻 靖章 名城大学農学部 教授
西海 功 国立科学博物館動物研究部 研究主幹

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 爬虫類・両生類分科会

太田 英利 兵庫県立大学自然・環境科学研究所 教授
竹中 踐 東海大学 名誉教授
戸田 守 琉球大学熱帯生物圏研究センター 准教授

福山 欣司 慶應義塾大学経済学部 教授
◎松井 正文 京都大学 名誉教授

◆絶滅のおそれのある野生生物種の選定・評価検討会 汽水・淡水魚類分科会

乾 隆帝 福岡工業大学社会環境学部 准教授
小泉 逸郎 北海道大学地球環境科学研究所 准教授
小早川 みどり 日本魚類学会 会員
清水 孝昭 愛媛県農林水産研究所水産研究センター栽培資源研究所 担当係長
鈴木 寿之 大阪市立自然史博物館 外来研究員
立原 一憲 琉球大学理学部海洋自然科学科 教授
◎細谷 和海 近畿大学 名誉教授
前田 健 沖縄科学技術大学院大学 スタッフサイエンティスト
渡辺 勝敏 京都大学大学院理学研究科 准教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 昆虫類分科会

荒谷 邦雄 九州大学大学院比較社会文化研究院 教授
◎石井 実 大阪府立大学 名誉教授・学長顧問
大原 賢二 徳島県立佐那河内いきものふれあいの里ネイチャーセンター センター長
苅部 治紀 神奈川県立生命の星・地球博物館 主任学芸員
岸田 泰則 日本蛾類学会 会長
北野 忠 東海大学教養学部人間環境学科 教授
神保 宇嗣 国立科学博物館動物研究部 研究主幹
多田内 修 九州大学 名誉教授
林 正美 埼玉大学 名誉教授
丸山 宗利 九州大学総合研究博物館 准教授
矢後 勝也 東京大学総合研究博物館 助教

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 貝類分科会

◎岩崎 敬二 奈良大学文学部地理学科 教授
亀田 勇一 国立科学博物館分子生物多様性研究資料センター 協力研究員
木村 妙子 三重大学大学院生物資源学研究科 教授
久保 弘文 沖縄県海洋深層水研究所 所長
窪寺 恒己 国立科学博物館 名誉研究員
近藤 高貴 大阪教育大学 名誉教授
瀬川 進 東京海洋大学 名誉教授
土屋 光太郎 東京海洋大学海洋環境科学部門 准教授
早瀬 善正 株式会社東海アクアノーツ 主査研究員
福田 宏 岡山大学大学院環境生命科学研究科 准教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 その他無脊椎動物分科会

- 石井 清 獨協医科大学 名誉教授
◎大高 明史 弘前大学教育学部理科教育講座 教授
佐藤 英文 東京家政大学短期大学部 特任教授
島野 智之 法政大学自然科学センター 教授
谷川 明男 東京大学大学院農学生命科学研究科 農学特定支援員
鶴崎 展巨 鳥取大学農学部 教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 維管束植物分科会

- 伊藤 元己 東京大学大学院総合文化研究科 教授
海老原 淳 国立科学博物館植物研究部 研究主幹
勝山 輝男 神奈川県立生命の星・地球博物館 名誉館員
◎角野 康郎 神戸大学 名誉教授
黒沢 高秀 福島大学共生システム理工学類 教授
高宮 正之 熊本大学 名誉教授
藤井 伸二 人間環境大学人間環境学部 准教授
矢原 徹一 九州大学大学院理学研究院 教授
横田 昌嗣 琉球大学理学部海洋自然科学科 教授

◆絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 蘚苔類・藻類・地衣類・菌類分科会

蘚苔類

- 有川 智己 慶應義塾大学経済学部 准教授
片桐 知之 服部植物研究所 所長
樋口 正信 国立科学博物館植物研究部 部長
古木 達郎 千葉県立中央博物館生態・環境研究部生態学・環境研究科 主任上席研究員
山口 富美夫 広島大学大学院統合生命科学研究科 教授

藻類

- 神谷 充伸 東京海洋大学学術研究院 教授
北山 太樹 国立科学博物館植物研究部 研究主幹
坂山 英俊 神戸大学大学院理学研究科 准教授
◎田中 次郎 東京海洋大学 名誉教授
寺田 竜太 鹿児島大学大学院連合農学研究科 教授
畠田 智 お茶の水女子大学基幹研究院自然科学系 教授

地衣類

- 井上 正鉄(故) 秋田大学 名誉教授
大村 嘉人 国立科学博物館植物研究部 研究主幹

柏谷 博之 国立科学博物館 名誉研究員
竹下 俊治 広島大学大学院教育学研究科 教授
宮脇 博巳 佐賀大学教育学部 教授
吉田 考造 埼玉県立自然の博物館 外部研究者

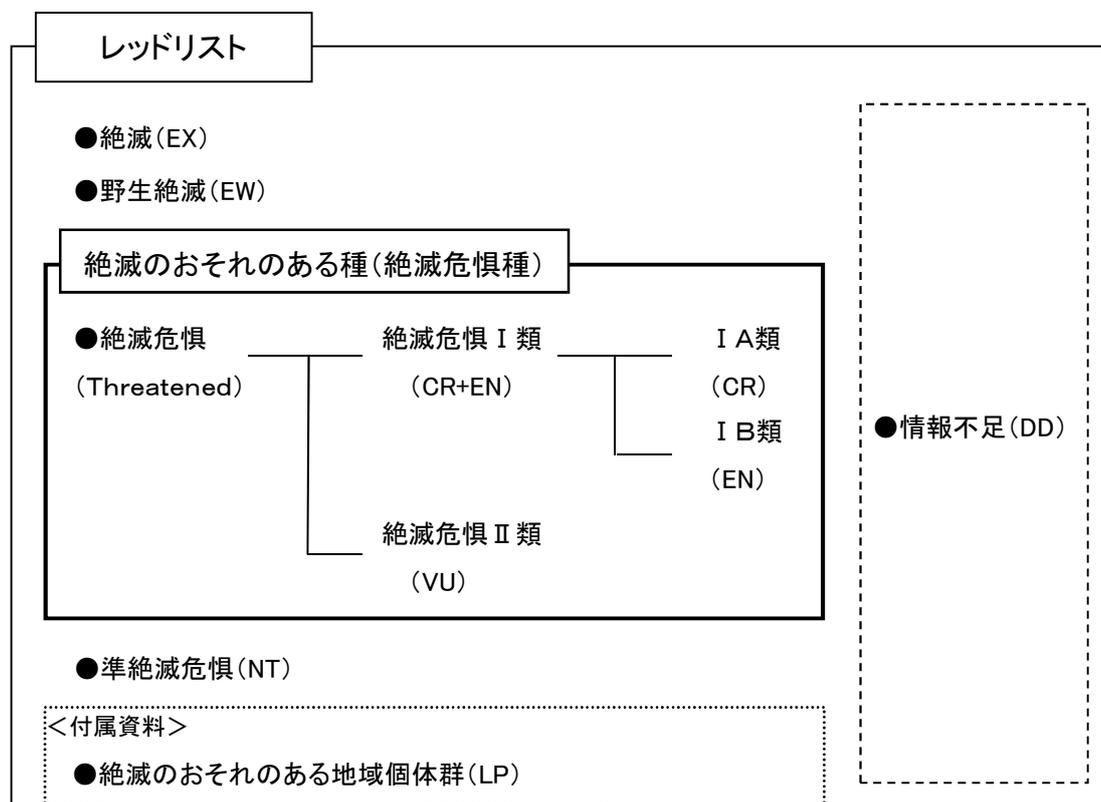
菌類

糟谷 大河 慶應義塾大学経済学部 准教授
服部 力 森林研究・整備機構森林総合研究所きのこ・森林微生物研究領域 領域長
吹春 俊光 千葉県立中央博物館 植物学研究科長
保坂 健太郎 国立科学博物館植物研究部 研究主幹
細矢 剛 国立科学博物館植物研究部 菌類・藻類研究グループ長

環境省レッドリストカテゴリーと判定基準（2020）

【カテゴリー（ランク）】

今回のレッドリスト見直しに際して用いたカテゴリーは下記のとおりであり、第4次レッドリスト（2012、2013）やレッドリスト2019で使用されているカテゴリーと同一である。



【判定基準】

2001年にIUCN（国際自然保護連合）が新たな数値基準を採用した「IUCN レッドリストカテゴリーと基準」*1を発行したことを受けて、第3次レッドリスト作成時にカテゴリーの判定基準の一部変更を行い、第4次レッドリストやレッドリスト2018作成時も同様の判定基準を用いた。今回の見直しにおいても第4次レッドリストの判定基準を踏襲して、各対象種の評価を実施した。判定基準の詳細については、次ページ以降に示すとおりである。

また、数値基準による評価が可能となるようなデータが得られない種も多いことから、第4次リストで用いてきたものと同様に、「定性的要件」と「定量的要件(数値基準)」を併用するが、原則として、随時見直しを行う種については、「定量的要件」を適用することとした。なお、「定性的要件」と「定量的要件」は、必ずしも厳密な対応関係にあるわけではないが、現時点では併用が最善との結論に至ったものである。

*1 IUCN (2001) IUCN Red List Categories and Criteria: Version 3.1. IUCN Species Survival Commission. Gland, Switzerland and Cambridge, U.K.

■ カテゴリー（ランク）と判定基準

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
<p>絶滅 Extinct (EX) 我が国ではすでに絶滅したと 考えられる種(注1.以下同じ)</p>	<p>過去に我が国に生息したことが確認さ れており、飼育・栽培下を含め、我が国 ではすでに絶滅したと考えられる種</p> <p>具体的には、以下のいずれかの事項 を満たす場合が想定される。 ①信頼できる調査や記録により、すで に野生で絶滅したことが確認されてい る。 ②信頼できる複数の調査によっても、 生息が確認できなかった。 ③過去50年間前後の間に、信頼できる 生息の情報が得られていない。</p>	
<p>野生絶滅 Extinct in the Wild (EW) 飼育・栽培下、あるいは自然分 布域の明らかに外側で野生化 した状態でのみ存続している 種</p>	<p>過去に我が国に生息したことが確認さ れており、飼育・栽培下、あるいは自然 分布域の明らかに外側で野生化した 状態では存続しているが、我が国にお いて本来の自然の生息地ではすでに 絶滅したと考えられる種 (具体的要件は「絶滅」と同じ)</p>	
<p>絶滅危惧 THREATENED</p> <p>絶滅危惧 I 類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN) 絶滅の危機に瀕して いる種</p> <p>現在の状態をもたらした 圧迫要因が引き続き作 用する場合、野生での存 続が困難なもの。</p>	<p>次のいずれかに該当する種</p> <p>【確実な情報があるもの】 ①既知のすべての個体群で、危機的水 準にまで減少している。 ②既知のすべての生息地で、生息条件 が著しく悪化している。 ③既知のすべての個体群がその再生 産能力を上回る捕獲・採取圧にさら されている。 ④ほとんどの分布域に交雑のおそれの ある別種が侵入している。</p> <p>【情報量が少ないもの】 ⑤それほど遠くない過去(30年～50年) の生息記録以後確認情報がなく、そ の後信頼すべき調査が行われてい ないため、絶滅したかどうかの判断 が困難なもの。</p>	<p>絶滅危惧 I A 類 Critically Endangered (CR)</p> <p>ごく近い将来に おける野生で の絶滅の危険 性が極めて高 いもの。</p> <p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる 場合。 1. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期 間(注2.以下同じ)を通じて、90%以上の減少 があったと推定され、その原因がなくなっ ており、且つ理解されており、且つ明らかに可 逆的である。 2. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期 間を通じて、80%以上の減少があったと推定 され、その原因がなくなっていない、理解され ていない、あるいは可逆的でない。 3. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長期間 を通じて、80%以上の減少があると予測され る。 4. 過去と未来の両方を含む10年間もしくは3世 代のどちらか長い期間において80%以上の 減少があると推定され、その原因がなくなっ ていない、理解されていない、あるいは可逆的 でない。</p> <p>B. 出現範囲が100km²未満もしくは生息地面積が 10km²未満であると推定されるほか、次のうち2 つ以上の兆候が見られる場合。 1. 生息地が過度に分断されているか、ただ1カ 所の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に継 続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極 度の減少が見られる。</p>

(注1)種：動物では種及び亜種、植物では種、亜種及び変種（一部に品種を含む）を示す。

(注2)過去10年間もしくは3世代：1世代が短く3世代に要する期間が10年未満のものは年数を、1世代が長く3世代に要する期間が10年を超えるものは世代数を採用する。

■ カテゴリー（ランク）と判定基準

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
<p>絶滅危惧 I 類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN) 絶滅の危機に瀕している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。</p> <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">絶滅危惧 T H R E A T E N E D</p>		<p>絶滅危惧 I A 類 Critically Endangered (CR)</p> <p>ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。</p> <p>C. 個体群の成熟個体数が250未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 3年間もしくは1世代のどちらか長い期間に25%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 <ol style="list-style-type: none"> a) 個体群構造が次のいずれかに該当 <ol style="list-style-type: none"> i) 50以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。 ii) 1つの下位個体群中に90%以上の成熟個体が属している。 b) 成熟個体数の極度の減少 <p>D. 成熟個体数が50未満であると推定される個体群である場合。</p> <p>E. 数量解析により、10年間、もしくは3世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が50%以上と予測される場合。</p>
		<p>絶滅危惧 I B 類 Endangered (EN)</p> <p>I A類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。</p> <p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、70%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっており、且つ理解されており、且つ明らかに可逆的である。 2. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 3. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長期間を通じて、50%以上の減少があると予測される。 4. 過去と未来の両方を含む10年間もしくは3世代のどちらか長い期間において50%以上の減少があると推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 <p>B. 出現範囲が5,000km²未満もしくは生息地面積が500km²未満であると推定されるほか、次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生息地が過度に分断されているか、5以下の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に継続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。

■ カテゴリー（ランク）と判定基準

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">絶滅危惧</p> <p>絶滅危惧 I 類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN) 絶滅の危機に瀕している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。</p>		<p>絶滅危惧 I B 類 Endangered (EN)</p> <p>I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。</p> <p>C. 個体群の成熟個体数が2,500未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 5年間もしくは2世代のどちらか長い期間に20%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 <ol style="list-style-type: none"> a) 個体群構造が次のいずれかに該当 <ol style="list-style-type: none"> i) 250以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。 ii) 1つの下位個体群中に95%以上の成熟個体が属している。 b) 成熟個体数の極度の減少 <p>D. 成熟個体数が250未満であると推定される個体群である場合。</p> <p>E. 数量解析により、20年間、もしくは5世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が20%以上と予測される場合。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">T H R E A T E N E D</p> <p>絶滅危惧 II 類 Vulnerable (VU) 絶滅の危険が増大している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの。</p>	<p>次のいずれかに該当する種</p> <p>【確実な情報があるもの】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 ② 大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。 ③ 大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④ 分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。 	<p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっており、且つ理解されており、且つ明らかに可逆的である。 2. 過去10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 3. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長期間を通じて、30%以上の減少があると予測される。 4. 過去と未来の両方を含む10年間もしくは3世代のどちらか長い期間において30%以上の減少があると推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 <p>B. 出現範囲が20,000km²未満もしくは生息地面積が2,000km²未満であると推定され、また次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生息地が過度に分断されているか、10以下の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等について、継続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。

■ カテゴリー（ランク）と判定基準

カテゴリー及び基本概念		定性的要件	定量的要件
絶滅危惧	<p>絶滅危惧Ⅱ類 Vulnerable (VU) 絶滅の危険が増大している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの。</p>		<p>C. 個体群の成熟個体数が10,000未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 10年間もしくは3世代のどちらか長い期間に10%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 <ol style="list-style-type: none"> a) 個体群構造が次のいずれかに該当 <ol style="list-style-type: none"> i) 1,000以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。 ii) 1つの下位個体群中にすべての成熟個体が属している。 b) 成熟個体数の極度の減少 <p>D. 個体群が極めて小さく、成熟個体数が1,000未満と推定されるか、生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている場合。</p> <p>E. 数量解析により、100年間における絶滅の可能性が10%以上と予測される場合。</p>
	<p>準絶滅危惧 Near Threatened (NT) 存続基盤が脆弱な種</p> <p>現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位カテゴリーに移行する要素を有するもの。</p>	<p>次に該当する種</p> <p>生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。</p> <ol style="list-style-type: none"> a) 個体数が減少している。 b) 生息条件が悪化している。 c) 過度の捕獲・採取による圧迫を受けている。 d) 交雑可能な別種が侵入している。 	
	<p>情報不足 Data Deficient (DD) 評価するだけの情報が不足している種</p>	<p>次に該当する種</p> <p>環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性(具体的には、次のいずれかの要素)を有しているが、生息状況をはじめとして、カテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。</p> <ol style="list-style-type: none"> a) どの生息地においても生息密度が低く希少である。 b) 生息地が局限されている。 c) 生物地理上、孤立した分布特性を有する(分布域がごく限られた固有種等)。 d) 生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。 	

■ 付属資料

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
<p>絶滅のおそれのある地域個体群 Threatened Local Population (LP)</p> <p>地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。</p>	<p>次のいずれかに該当する地域個体群</p> <p>①生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される地域個体群で、生息域が孤立しており、地域レベルで見た場合絶滅に瀕しているかその危険が増大していると判断されるもの。</p> <p>②地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。</p>	

【哺乳類】

■補遺資料掲載種一覧

和名		学名		RL カテゴリ	
RL2019(旧)	RL2020	RL2019(旧)	RL2020	2019	2020
チョウセンイタチ	シベリアイタチ	<i>Mustela sibirica coreana</i>	<i>Mustela sibirica</i>	NT	EN
—	房総半島のホンダザル	—	<i>Macaca fuscata fuscata</i>	—	LP
—	紀伊山地のカモシカ	—	<i>Capricornis crispus</i>	—	LP
—	鈴鹿山地のカモシカ	—	<i>Capricornis crispus</i>	—	LP

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): NT

食肉目イタチ科

【哺乳類】

シベリアイタチ

Mustela sibirica Pallas, 1773

カテゴリー判定基準: B-1, 3

基礎情報

レッドデータブック 2014(哺乳類)p. 83.を参照(旧和名のチョウセンイタチで掲載)。

<https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/哺乳類_047.pdf>

分布域・生息地・個体数の現況

国内では対馬のみに自然分布する。環境省・長崎県が実施しているセンサーカメラを用いた調査(主な対象はツシマヤマネコ)の結果によれば、上島で行われた 1994~2015 年度の調査では、2001 年度までは複数地点で撮影されたが、2005 年度以降はほとんど撮影されておらず、2014~2015 年度は全く撮影されなかった。下島では、2007~2015 年度の調査において継続的に複数地点で撮影されたが、撮影頻度は 1996~2000 年度の調査に比べて低下していた。

随時見直しの評価理由

本種については、ツシマヤマネコの生息状況の把握を目的としたセンサーカメラ調査の結果や、糞等の痕跡による生息確認調査の結果から、近年の急激な個体数減少が示唆されたため、随時見直しの対象とした。

存続を脅かす要因 河川開発(13) 遷移進行・植生変化(54) 競争(在来種による)(56-2)

参考文献

佐々木浩, 2018. シベリアイタチ 対馬の在来種と西日本の外来種, 増田隆一(編) 日本の食肉類, pp. 225-245. 東京大学出版会, 東京.

執筆: 石井信夫(東京女子大学)

LP

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし

霊長目ザル科

【哺乳類】

房総半島のホンドザル

Macaca fuscata fuscata (Gray, 1870)

カテゴリー判定基準: ①

基礎情報

当該個体群は長く孤立個体群として維持されてきたと考えられ、遺伝的解析の結果も隔離個体群であることを示唆している。mtDNA や形態においても独自性がみられる。

分布域・生息地・個体数の現況

房総半島に分布する。南房総市で野生化が始まったアカゲザルとの交雑が進んでおり、当該個体群独自の遺伝的性質の変化・消失が危惧されている。交雑率は 2007~2011 年の調査では全体で 6.4%であったのに対し、7 群について交雑率が算出された 2015 年の調査では群れによって 0~70%、最大値と最小値を除いて平均した値は約 30%となり、顕著な上昇が示された。

随時見直しの評価理由

房総半島のホンドザルは、本州の他個体群から孤立した個体群として維持されてきたが、遅くとも 1970 年代に野生化していた外来種アカゲザルの個体の拡散により交雑が進行した。近年、交雑個体の数が増加傾向にあることから、随時見直しの対象とした。

存続を脅かす要因 交雑(外来種による)(57-1)

参考文献

川本芳・川本咲江・濱田穰・山川央・直井洋司・萩原光・白鳥大祐・白井啓・杉浦義文・郷康広・辰本将司・柁裕永・羽山伸一・丸橋珠樹, 2017. 千葉県房総半島の高宕山自然動物園でのアカゲザル交雑と天然記念物指定地域への交雑拡大の懸念. 霊長類研究, 33: 69-77.

川本芳・川本咲江・濱田穰・川合静・白井啓・吉田淳久・萩原光・白鳥大祐・直井洋司, 2007. 房総半島に定着したアカゲザル集団におけるニホンザルとの交雑進行. 霊長類研究, 23: 81-89.

萩原光・相澤敬吾・蒲谷肇・川本芳, 2003. 房総半島の移入種を含むマカカ属個体群の生息状況と遺伝的特性. 霊長類研究, 19: 229-241.

執筆: 石井信夫(東京女子大学)

LP

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):なし

偶蹄目ウシ科

【哺乳類】

紀伊山地のカモシカ

Capricornis crispus (Temminck, 1845)

カテゴリー判定基準:①

基礎情報

当該個体群は他の個体群から孤立して分布している。また、mtDNA のマイクロサテライトの分析から、本州中部の個体群と紀伊山地の個体群の間の遺伝子流動は限定的であることが示された(三重県教育委員会ほか 2018)。

分布域・生息地・個体数の現況

紀伊山地カモシカ保護地域とその周辺に分布する。2016～2017 年度に行われた紀伊山地カモシカ保護地域第 5 回特別調査では、紀伊山地全域で合計 784 頭が生息すると推定されている(三重県教育委員会ほか 2018)。これは、紀伊山地全域で約 2500 頭と推定した 2008～2009 年度の調査結果(三重県教育委員会ほか 2010)に比べて大幅な減少である。減少要因として、増加するニホンジカが引き起こしている植生変化の影響が疑われている。

随時見直しの評価理由

紀伊山地のカモシカ個体群は分布範囲は広いものの、近年のカモシカ特別調査において、生息密度の低下が示されていることから、随時見直しの対象とした。

存続を脅かす要因 遷移進行・植生変化(54) 競争(在来種による)(56-2)

参考文献

三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会 (2018) 紀伊山地カモシカ保護地域第 5 回特別調査報告書. 279pp.
三重県教育委員会・奈良県教育委員会・和歌山県教育委員会 (2010) 紀伊山地カモシカ保護地域第 4 回特別調査報告書. 219pp.

執筆:石井信夫(東京女子大学)

LP

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):なし

偶蹄目ウシ科

【哺乳類】

鈴鹿山地のカモシカ

Capricornis crispus (Temminck, 1845)

カテゴリー判定基準:①

基礎情報

当該個体群は、伊吹山地個体群と隣接するが、地理的に孤立している。形態や遺伝的性質における独自性は確認されていない。

分布域・生息地・個体数の現況

鈴鹿山地カモシカ保護地域とその周辺に分布する。同保護地域に関する第 5 回特別調査(2014～2015 年度)によると、保護地域内の生息確認メッシュ数は、第 4 回特別調査(2006～2007 年度)に比べ、182 から 61 へと大きく減少していた(三重県教育委員会・滋賀県教育委員会 2008, 2016)。また、同調査で実施された区画法による平均生息密度は、第 4 回特別調査時に 0.8 頭/km²であったのに対し、第 5 回特別調査では 0.5 頭/km²に低下していた。減少要因として、ニホンジカの増加と植生変化の影響が示唆されている。

随時見直しの評価理由

鈴鹿山地のカモシカ個体群は小規模で孤立した個体群であり、近年のカモシカ特別調査結果において分布域の縮小・断片化と生息密度の低下が示されていることから、随時見直しの対象とした。

存続を脅かす要因 遷移進行・植生変化(54) 競争(在来種による)(56-2)

参考文献

三重県教育委員会・滋賀県教育委員会, 2016. 平成 26 年度鈴鹿山地カモシカ保護地域第 5 回特別調査, 三重県教育委員会, 津. 198pp.
三重県教育委員会・滋賀県教育委員会, 2008. 平成 18・19 年度鈴鹿山地カモシカ保護地域第 4 回特別調査, 三重県教育委員会, 津. 107pp.

執筆:石井信夫(東京女子大学)

【鳥類】

■補遺資料掲載種一覧

和名		学名		RL カテゴリ	
RL2019(旧)	RL2020	RL2019(旧)	RL2020	2019	2020
—	オオセグロカモメ	—	<i>Larus schistisagus</i>	—	NT

オオセグロカモメ

Larus schistisagus Stejneger, 1884

カテゴリー判定基準:a)

基礎情報

本種は、全長約 64 cmのカモメ科鳥類である。主たる繁殖分布域は、沿海州、オホーツク海、カムチャツカ半島、サハリン、千島列島、北海道、本州北部の沿岸域である。越冬期は繁殖地に留まる個体と南下する個体があり、日本では北海道から関東地方で多数が、それ以南では少数が越冬する。ほとんどの個体が海岸から沿岸海上に周年生息し、魚類、甲殻類などを食べる。人やキツネ等の捕食者が近づけない孤島、崖地、離岸防波堤、建物の屋上などで主に集団繁殖する。

分布域・生息地・個体数の現況

現在の本種の繁殖地は、北海道全域、東北地方、北陸地方に点在している。しかし、1980年代に多数が繁殖していた多くの繁殖地では、繁殖個体数の著しい減少が続いている。一部地域では、2000年以降に港湾施設や家屋上で繁殖する個体数が増えているが、これらの繁殖個体数を足し合わせても、1980年代の総繁殖個体数には満たないと考えられる。減少要因は明らかではないが、オジロワシによる捕食圧の増加や餌資源の減少が考えられる。

随時見直しの評価理由

本種は2000～2015年に全国で72コロニー・4,456巣が確認されている。また、主に2000年以降に北海道内各地の港湾施設や家屋上で新たに繁殖する個体が確認されている。しかし、天売島、知床半島、モユルリ島、ユルリ島における本種の巣数は、2004～2013年に20.9～86.3%減少した(環境省自然環境局生物多様性センター 2015)。また、我が国の本種の繁殖個体数は、1980～2015年に大きく減少したと推定された(Senzaki et al. in press)。このように、我が国における本種の個体数は近年急激に減少していると考えられることから、本種の評価の見直しを行う。

存続を脅かす要因 不明(99) 海岸開発(14) 捕獲・狩猟(41) 捕食(在来種による)(52-4) その他(71)

参考文献

環境省自然環境局生物多様性センター、2015。重要生態系監視地域モニタリング推進事業(モニタリングサイト1000)海鳥調査第2期とりまとめ報告書。87pp。
Senzaki, M., A. Terui, N. Tomita, F. Sato, Y. Fukuda, Y. Kataoka and Y. Watanuki, Long-term declines in common breeding seabirds in Japan. Bird Conservation International, in press.

執筆:先崎理之(北海道大学)

【爬虫類】

■補遺資料掲載種一覧

和名		学名		RL カテゴリ	
RL2019(旧)	RL2020	RL2019(旧)	RL2020	2019	2020
ツシマスベトカゲ	削除	<i>Scincella vandenburghi</i>	削除	DD	削除

削除

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): DD

有鱗目トカゲ科

【爬虫類】

ツシマスベトカゲ

Scincella vandenburghi (Schmidt, 1927)

削除理由

本種は、生息地域の道路開発等による環境変化が進み、生息状況が危惧されたが、文献情報等が少なく、DD と判定されてきた。しかし、2018 年に環境省レッドリスト見直しに係る現地調査が行われて生息状況を評価するための一定量の情報が集積された。本種の生息状況は、対馬全域で確認されるとともに、減少が危惧された環境変化があった場所においても多くの個体が確認され、危惧される状況にはないことが判明したためレッドリストから削除した。

参考文献

Chen, S., T. Hikida, S. Han, J. Shim, H. Oh, and H. Ota, 2001. Taxonomic status of the Korean populations of the genus *Scincella* (Squamata: Scincidae). *Journal of Herpetology*, 35: 122-129.

竹中 踐, 1987. 対馬産アムールカナヘビとツシマスベトカゲについて, 長崎県 (編) 対馬の自然, pp. 161-173. 長崎.

関慎太郎, 2018. 野外観察のための日本産爬虫類図鑑第 2 版, 緑書房, 東京. 212pp.

執筆: 竹中 踐 (東海大学名誉教授)

【両生類】

■補遺資料掲載種一覧

和名		学名		RL カテゴリー	
RL2019(旧)	RL2020	RL2019(旧)	RL2020	2019	2020
—	トサシミズサンショウウオ	—	<i>Hynobius tosashimizuensis</i>	—	CR
—	アブサンショウウオ	—	<i>Hynobius abuensis</i>	—	EN
—	アキサンショウウオ	—	<i>Hynobius akiensis</i>	—	EN
—	イワミサンショウウオ	—	<i>Hynobius iwami</i>	—	EN
ブチサンショウウオ	ブチサンショウウオ※	<i>Hynobius naevius</i>	<i>Hynobius naevius</i>	NT	EN
—	サンインサンショウウオ	—	<i>Hynobius setoi</i>	—	EN
—	ツルギサンショウウオ	—	<i>Hynobius tsurugiensis</i>	—	EN
キタサンショウウオ	キタサンショウウオ	<i>Salamandrella keyserlingii</i>	<i>Salamandrella keyserlingii</i>	NT	EN
—	ヤマグチサンショウウオ	—	<i>Hynobius bakan</i>	—	VU
オオイタサンショウウオ	オオイタサンショウウオ※	<i>Hynobius dunni</i>	<i>Hynobius dunni</i>	VU	VU
—	ヒガシヒダサンショウウオ	—	<i>Hynobius fossigenus</i>	—	VU
—	マホロバサンショウウオ	—	<i>Hynobius guttatus</i>	—	VU
—	イヨシマサンショウウオ	—	<i>Hynobius kuishiensis</i>	—	VU
カスミサンショウウオ	カスミサンショウウオ※	<i>Hynobius nebulosus</i>	<i>Hynobius nebulosus</i>	VU	VU
—	チクシブチサンショウウオ	—	<i>Hynobius oyamai</i>	—	VU
—	チュウゴクブチサンショウウオ	—	<i>Hynobius sematonotos</i>	—	VU
—	セトウチサンショウウオ	—	<i>Hynobiuss setouchi</i>	—	VU
コガタブチサンショウウオ	コガタブチサンショウウオ ※	<i>Hynobius stejnegeri</i>	<i>Hynobius stejnegeri</i>	NT	VU
—	ヒバサンショウウオ	—	<i>Hynobius utsunomiyaorum</i>	—	VU
—	ヤマトサンショウウオ	—	<i>Hynobius vandenburghi</i>	—	VU
ヒダサンショウウオ	ヒダサンショウウオ※	<i>Hynobius kimurae</i>	<i>Hynobius kimurae</i>	NT	NT

※種が分離されたため再評価

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

トサシミズサンショウウオ

日本固有種

Hynobius tosashimizuensis Sugawara, Watabe, Yoshikawa & Nagano, 2018

カテゴリー判定基準: B-1,2,3

基礎情報

頭胴長 60~73mm。オオイタサンショウウオに似るが、背面は一樣に緑褐色で、黒斑がない。腹面は淡色。卵嚢は長く、数回巻く。分子系統学的にはアブサンショウウオと近縁とされる。丘陵地の林床や草地に生息し、湿地や池、緩やかな流れの溜まりなどに産卵する。産卵期は 1~4 月で 2 月が最盛期。一腹卵数は、54~117 個。幼生は多くが 7~8 月に変態・上陸する。変態直後幼体の全長は、52mm 程度。

分布域・生息地・個体数の現況

高知県土佐清水市にのみ分布する。標高 300m 程の丘陵地のスギ植林内の小さな沢や湿地周辺に生息する。かつて多数が産卵した湿地が 1 箇所消失し、現在は保全対策として整備されている代替の湿地や池十数箇所によって個体群が維持されている。毎年 100 腹分の産卵が確認されていることから、生息個体数は成体だけで約 200 個体と推定されている。わんぱーくこうちアニマルランドを中心に全国 4 箇所域外保全されている。

随時見直しの評価理由

2018 年 6 月にオオイタサンショウウオから分割され、新種記載された。生息範囲が局限しており、減少傾向も明らかである。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 湿地開発(15-1) 草地開発(16) 土地造成(23) 道路建設(24) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3) 自然災害(55)

参考文献

Sugawara, H., T. Watabe, T. Yoshikawa, and M. Nagano, 2018. Morphological and molecular analyses of *Hynobius dunni* reveal a new species from Shikoku, Japan. *Herpetologica*, 74: 159-168.

田辺真吾, 2002. オオイタサンショウウオ, 高知県林業振興・環境部環境共生課(編) 高知県レッドデータブック(動物編), pp. 162-163. 高知.

執筆者: 田辺真吾(日本爬虫両棲類学会会員)・松井正文(京都大学名誉教授)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

アブサンショウウオ

日本固有種

Hynobius abuensis Matsui, Okawa, Nishikawa & Tominaga, 2019

カテゴリー判定基準: B-2,3

基礎情報

卵嚢外被に条線がある。体は大型(オス全長 78~134mm、平均 108mm)で胴は短い。四肢は長い。尾は非常に長く、下縁に黄色の条線がない。トサシミズサンショウウオを姉妹種としアキサンショウウオ・ヒバサンショウウオのなす群と姉妹群をなす。ヒバサンショウウオより尾は長く、丈が高く、幅が狭くて、四肢が長く、アキサンショウウオより大型で、頭が幅広く、尾と四肢が長く、前後肢の重なりが大きい。

分布域・生息地・個体数の現況

これまで中国地方の狭い範囲(島根県、山口県)のみから知られ、既知の産地の標高は 150~970m。分布域は西方をヤマグチサンショウウオ、東方をイワミサンショウウオに仕切られる。イワミサンショウウオとの分布の境界地域ではイワミサンショウウオよりも標高の高い場所に生息する。比較的標高が低い生息地では、生息状況の劣化が進行していると考えられる。

随時見直しの評価理由

2019 年 2 月にカスミサンショウウオから分割され、新種記載された。生息範囲は本州西部の一部に限定される。低標高の生息地ではすでに圃場整備・耕作放棄・用水池の撤去等による繁殖場所の乾燥悪化、産卵環境の消失があったことに加え、業者、愛好家による乱獲が懸念される。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 交通事故(26) 捕獲・狩猟(41) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55)

参考文献

Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current Herpetology*, 38: 32-90.

執筆者: 大川博志(広島学院中・高)・松井正文(京都大学名誉教授)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

アキサンショウウオ

日本固有種

Hynobius akiensis Matsui, Okawa & Nishikawa, 2019

カテゴリー判定基準: B-1,2,3

基礎情報

体は小型(オス全長 73~123mm、平均 97mm)、前後肢は比較的短くて 2 肋皺分、分離し、鋤骨歯列は長く幅広い。尾は中程度の長さで通常尾の上下縁に黄色の条線をもたない。ヒバサンショウウオと単系統群をなすが、鋤骨歯列と第 5 趾相対長がより長く、前後肢の分離の程度が大きい。アブサンショウウオより頭胴長と前後肢間比が小さく、頭が短く、尾と四肢が短く、前後肢の重なり程度が低い。

分布域・生息地・個体数の現況

これまで中国地方中南部及び四国北西部から知られる。既知の産地の標高は 80~600m である。分布域は東方をセトウチサンショウウオ、西方をイワミサンショウウオ、北方をヒバサンショウウオで仕切られる。北部地域個体群はヒバサンショウウオとの中間型と呼ばれてきた。産卵場が道路工事や宅地造成のために削られたり、埋められたり、圃場整備により水が出なくなったりすることによる絶滅の恐れがある。

随時見直しの評価理由

2019 年 2 月にカスミサンショウウオから分割され、新種記載された。生息範囲は本州西部と四国の一部に限定される。すでに圃場整備・耕作放棄による乾燥化・砂防ダムの建設、道路建設、森林伐採等の開発による生息環境の悪化、産卵環境の消失があったことに加え、販売(ネット上での売買)、飼育目的の業者、愛好家による乱獲が近年特に顕著である。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54)

参考文献

Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current Herpetology*, 38: 32-90.

執筆: 大川博志(広島学院中・高)・松井正文(京大名誉教授)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

イワミサンショウウオ

日本固有種

Hynobius iwami Matsui, Okawa, Nishikawa & Tominaga, 2019

カテゴリー判定基準: B-1,2,3

基礎情報

体は小型(オス全長 65~130mm、平均 96mm)、尾は中程度に長く、上下縁に明瞭な黄色の条線をもつ。オキサンショウウオ、ヤマグチサンショウウオ、カスミサンショウウオ、ツシマサンショウウオと単系統群をなすが、それらの全てと、通常第 5 趾を欠くことで異なる。またヤマグチサンショウウオ、カスミサンショウウオより頭が長くて胴が短い。カスミサンショウウオより前後肢の重なりが大きく、肋条数が少ない。

分布域・生息地・個体数の現況

これまで本州西部の主に日本海に沿った狭い範囲から知られている。既知の産地の標高は 50~1,000m と幅が広い。島根県北西部と近隣の広島県でサンインサンショウウオ、ヒバサンショウウオ、アキサンショウウオ、アブサンショウウオに取り囲まれている。

随時見直しの評価理由

2019 年 2 月にカスミサンショウウオから分割され、新種記載された。生息範囲は本州西部の一部に限定される。すでに圃場整備、砂防ダムの建設、道路建設、森林伐採等の開発による生息環境の悪化、産卵環境の消失があったことに加え、販売(ネット上での売買)、飼育目的の業者、愛好家による乱獲が近年特に顕著である。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54)

参考文献

Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current Herpetology*, 38: 32-90.

執筆: 大川博志(広島学院中・高)・松井正文(京大名誉教授)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): NT(種分離による再評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

ブチサンショウウオ

日本固有種

Hynobius naevius Temminck & Schlegel, 1838

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

長崎県・佐賀県・福岡県西部に生息。成体の頭胴長は 63~94mm。背面は青紫色で斑紋を欠く。側面、腹部には白色の斑紋を持つ。3月から6月初旬に山地溪流で繁殖。卵嚢は三日月型。卵径は 4.6~5.9mm、一腹卵数は 15~23 個。幼生は孵化した年の秋までに変態するが、一部は幼生越冬する。

分布域・生息地・個体数の現況

一部地域では減少傾向が見られる。具体的に懸念される脅威としては砂防ダムの建設、道路建設、森林伐採等の開発による生息環境の悪化、産卵環境の消失に加え、販売、飼育目的の採集が考えられる。

随時見直しの評価理由

2019年1月にブチサンショウウオからチュウゴクブチサンショウウオ、チクシブチサンショウウオが分割され、新種記載されたことにより、本種の生息範囲は九州北西部に限定された。従来の砂防堰堤、林道の建設、森林伐採等の開発による生息環境の悪化、水質汚濁に加え、販売、飼育目的の業者、愛好家による乱獲が顕著である。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 道路建設(24) ダム建設(25) 捕獲・狩猟(41)

参考文献

Tominaga, A., M. Matsui and K. Nishikawa, 2019. Two new species of lotic breeding salamanders (Amphibia, Caudata, Hynobiidae) from western Japan. *Zootaxa*, 4550: 525-544.

執筆: 富永 篤(琉球大学)・松井正文(京都大学名誉教授)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

サンインサンショウウオ

日本固有種

Hynobius setoi Matsui, Tanabe & Misawa, 2019

カテゴリー判定基準: B-2,3

基礎情報

体は大型(オス 83~117mm、平均 103mm)、四肢は比較的長く、ほとんど常に第 5 趾を持つ。尾の上下縁には明瞭な黄色の条線がある。ホクリクサンショウウオ、ミカワサンショウウオ、クロサンショウウオと単系統をなす。ヤマトサンショウウオより前後肢の重なりが大きく、肋鱗の数が少ない。セトウチサンショウウオに比べ、大型で胴と鋤骨歯列が短く、肋鱗の数が少ない。

分布域・生息地・個体数の現況

兵庫県北西部から島根県東部までの日本海沿いの、主に低地から知られる。耕作放棄による湿地の減少などにより確実に減少していると思われる。

随時見直しの評価理由

2019年2月にカミサンショウウオから分割され、新種記載された。生息範囲は本州西北部に限定される。すでに道路建設、森林伐採等の開発による生息環境の悪化、産卵環境の消失があったことに加え、業者、愛好家による乱獲が懸念される。

存続を脅かす要因 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54)

参考文献

Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current Herpetology*, 38: 32-90.

執筆: 松井正文(京都大学名誉教授)

ツルギサンショウウオ

Hynobius tsurugiensis Tominaga, Matsui, Tanabe & Nishikawa, 2019

カテゴリー判定基準:B-1.2

基礎情報

成体は頭胴長 51~74mm。背面は褐色地に黄白色の斑紋がある。腹面は黒色で斑紋を欠く個体が多い。遺伝的にはマホロバサンショウウオと最も近縁だがイヨシマサンショウウオにも近く、形態的に酷似する個体がいる。生息環境は落葉広葉樹林や針葉樹林内の谷沿いである。普段は林床の倒木下や砂礫中に生息し、5~6月に湧水中で産卵する。卵嚢は紐状。卵嚢の長さは 80~120mm、幅 8~13mm。一腹卵数は 19~28 個。

分布域・生息地・個体数の現況

四国東部(徳島県、高知県)の剣山周辺にのみ分布する。生息範囲は標高 1,100m 以上の主に自然林である。林道建設、大雨等による斜面の崩落、入山しやすい山域における採集圧、シカの増加による林床環境の変化などが生存を脅かしている。源流部に広く分布するため、個体数の把握は困難であるが、良好な生息地では、数十 m の枝沢に 20 個体前後が生息していた例がある。

随時見直しの評価理由

従来、コガタブチサンショウウオとされていたが、種の細分化に伴い 2019 年 8 月に新種記載された。分布域が四国東部の限られた山域のみであることに加え、繁殖習性が特殊なため、業者、愛好家による乱獲が産卵環境の消失に結びつき、個体群の減少をもたらしていると考えられる。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 捕獲・狩猟(41) 自然災害(55)

参考文献

Tominaga, A., M. Matsui, S. Tanabe and K. Nishikawa, 2019. A revision of *Hynobius stejnegeri*, a lotic breeding salamander from western Japan, with a description of three new species (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). *Zootaxa*, 4651: 401-433.

執筆: 田辺真吾(日本爬虫両棲類学会会員)・松井正文(京都大学名誉教授)

キタサンショウウオ

Salamandrella keyserlingii Dybowski, 1870

カテゴリー判定基準:B-1.2

基礎情報

頭胴長 6cm 程度、全長 12cm 程度の小型のサンショウウオ。国外での分布はヨーロッパロシア東部からサハリン、千島列島にかけて、国内では主に釧路湿原に分布する。近年、十勝地方の1地域でも分布が確認された。サハリンと釧路地域の個体群の分岐年代は約 190 万年前、釧路地域と十勝地方の個体群では約 30 万年前と推定されている。釧路、十勝では 4 月中旬頃から 5 月中旬頃にかけて産卵し、幼生は 7 月頃に変態・上陸する。繁殖水域は止水で、周辺は「谷地坊主」などがある湿原であることが多い。

分布域・生息地・個体数の現況

主な生息地である釧路湿原を中心とした地域では、釧路湿原国立公園特別地域指定や釧路市、標茶町の本種の天然記念物指定によって保護されている個体群もあるが、本種の生息・繁殖地の 3 分の 2 程度が保護区外にあり、道路開発、宅地・農地開発、太陽光発電施設建設等による繁殖地消失が継続している。また、天然記念物指定のない町村ではペットトレードを目的とした採集の影響が危惧される。近年発見された十勝地方の上士幌個体群は、その存続がきわめて危ぶまれる状況にある。もともとの開拓前の十勝地方の生息分布は釧路湿原地域に匹敵するほどの規模であった可能性がある。

随時見直しの評価理由

本種の主要な生息地である釧路湿原において、開発の影響を受ける事例が増加していることが報告されており、種全体の生息状況が悪化する傾向にある。従来、本種の分布は釧路湿原に限られるとされてきたが、2017 年に十勝地方の上士幌町において新たに分布が確認された。その後の現地研究者および環境省レッドリスト見直しに係る調査等によって、その地域における減少も著しく、その生息状況はきわめて脆弱であることが判明した。また、当該集団は釧路湿原の集団とは遺伝的に異なることが確認された。両集団は国外集団とは遺伝的に異なる保全上重要な集団であり、生息地の減少や状況の悪化が危惧されることから、それぞれの保護対策は急務である。

存続を脅かす要因

湖沼開発(12) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 草地開発(16) 土地造成(23) 道路建設(24) 水質汚濁(31) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3) 遷移進行・植生変化(54)

参考文献

佐藤孝則・松井正文, 2013. 北海道のサンショウウオたち, エコ・ネットワーク, 札幌. 258pp.

宮崎七奈衣・乙幡康之, 2017. 北海道上士幌町で確認されたキタサンショウウオの可能性のある卵嚢. 爬虫両棲類学会報, 2017: 148-150.

Matsui M., N. Yoshikawa, T. Tanaka-Ueno, T. Sato, S. Takenaka, S. Terui, S. Oppata and A. Tominaga, 2019. A genetic study of a newly found population of Siberian salamander, *Salamandrella keyserlingii* (Amphibia, Caudata). *Current Herpetology*, 38: 122-127.

執筆: 竹中 踐(東海大学名誉教授)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):なし(種分離による評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

ヤマグチサンショウウオ

日本固有種

Hynobius bakan Matsui, Okawa & Nishikawa, 2019

カテゴリー判定基準:B-1,2

基礎情報

体はやや小型(オス全長 63~123mm、平均 100mm)。四肢は中庸で、尾は中程度に長く、常に上下縁に明瞭な黄色の条線をもつ。カスミサンショウウオ、ツシマサンショウウオと単系統群をなし、この群はイワミサンショウウオ、オキサンショウウオと単系統群をなす。本種はカスミサンショウウオより頭胴長が小さくて鋤骨歯列が幅広く、イワミサンショウウオより胴が長くて頭が短く、第5趾が良く発達する。

分布域・生息地・個体数の現況

山口県の西部と九州東北部の一部から知られる。いずれの産地でも個体数は少ない。

随時見直しの評価理由

2019年2月にカスミサンショウウオから分割され、新種記載された。生息範囲は本州西部と九州東北部の一部に限定される。すでに圃場整備・耕作放棄による産卵環境・生息環境の悪化(乾燥化)、産卵環境の消失があったことに加え、販売目的の業者、愛好家による乱獲が懸念される。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 捕獲・狩猟(41) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54)

参考文献

Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current Herpetology*, 38: 32-90.

執筆者: 大川博志(広島学院中・高)・松井正文(京都大学名誉教授)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):VU(種分離による再評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

オオイタサンショウウオ

日本固有種

Hynobius dunni Tago, 1931

カテゴリー判定基準:B-1,2

基礎情報

全長はオスで157mm程度。四肢は長い。背面は黄褐色で黒点を散布する。カスミサンショウウオより大型で、尾の上下縁に黄色の条線がない。丘陵地や低山地にある常緑二次林、竹林、水田に生息する。繁殖は年1回、12月下旬~3月下旬で森林に接した池、沼、小河川のたまりで行われ、一腹卵数は87~143個(平均約106個)。幼生は6~9月に変態上陸し、林床の倒木、落葉、石の下などで生活する。

分布域・生息地・個体数の現況

九州の大分県、熊本県、宮崎県の限られた地域に分布する。カスミサンショウウオとはほぼ完全に地理的に隔離されている。人里近くの生息地では、近年、とくに環境の破壊や汚染が進んでいる。

随時見直しの評価理由

これまで本種の四国産とされた個体群がトサシズサンショウウオとして新種記載され、本種の生息範囲が縮小したことに加え、環境悪化によって個体数が減少すると予測されるため。

存続を脅かす要因

河川開発(13) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 洞窟の消失や環境悪化(18) 土地造成(23) 道路建設(24) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 捕獲・狩猟(41)

参考文献

Sugawara H., T. Watabe, T. Yoshikawa and M. Nagano, 2018. Morphological and molecular analyses of *Hynobius dunni* reveal a new species from Shikoku, Japan. *Herpetologica*, 74: 159-168.

執筆者: 松井正文(京都大学名誉教授)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

日本固有種

ヒガシヒダサンショウウオ

Hynobius fossigenus Okamiya, Sugawara, Nagano & Poyarkov, 2018

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

体は大型(オス頭胴長 66~81mm)で前後肢は2~1.5 肋皺分離れる。尾は長い円筒形で後方で側扁する。通常5趾性。鋤骨歯は深く幅広いU字型。背面は暗い紫褐色で黄金色の斑紋があり、腹面はより淡く斑紋を欠く。山地溪流で繁殖し、色素が無い大きな卵を少数産む。卵嚢皮は厚く虹色光沢があり、鞭状構造を持つ。ヒダサンショウウオより大型で、鋤骨歯列がより浅い。

分布域・生息地・個体数の現況

関東地方から中部地方にかけて分布する。一部地域で悪化し減少している。特に近年の小雨による溪流の渇水、台風接近に伴う豪雨などによる溪流への土砂流失や倒木の増加による生息環境の悪化が深刻で、本種の生息範囲が狭まり生息地の分断や個体群の孤立化を引き起こしているおそれがある。

随時見直しの評価理由

2018年6月にヒダサンショウウオの関東-中部南部産個体群が独立種として記載された。生息範囲が狭いことに加え、生息地は都心に近いため、業者、愛好家による乱獲が、個体群の減少をもたらすと予想される。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 道路建設(24) ダム建設(25) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 捕獲・狩猟(41) 自然災害(55)

参考文献

Okamiya, H., H. Sugawara, M. Nagano and N. A. Poyarkov, 2018. An integrative taxonomic analysis reveals a new species of lotic *Hynobius* salamander from Japan. PeerJ, 6: e5084.

執筆: 見澤康充(建設環境研究所)・松井正文(京都大学名誉教授)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

日本固有種

マホロバサンショウウオ

Hynobius guttatus Tominaga, Matsui, Tanabe & Nishikawa, 2019

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

頭胴長 51~67mm。背面には赤褐色ないし濃青色の基色に、褐色がかかった白色の小さな斑点がある。四肢と尾は長い。胴に沿って押し付けられた前後肢は会合しない。山地溪流源流域の伏流水中で繁殖する。卵は大型で黒色素を欠く。卵嚢は短い紐状で遊離端に明瞭な鞭状構造を持たない。コガタブチサンショウウオより体が小さく、上下顎歯数と鋤骨歯数が少なく、相対的に頭が大きく、尾が短く鋤骨歯列が深い。

分布域・生息地・個体数の現況

岐阜県・愛知県から和歌山県までの中部地方から近畿地方の山地に生息する。地域によってヒダサンショウウオ、オオダイガハラサンショウウオ、ハコネサンショウウオと同所分布している。近年の異常気象による溪流の渇水と増水による生息環境の悪化が深刻で、一部地域では個体数が減少している可能性がある。ペット業者やマニアによる卵や成体の採取がなされ、繁殖場所が攪乱され消滅している。

随時見直しの評価理由

従来、コガタブチサンショウウオとされていたが、種の細分化に伴い2019年8月に新種記載された。繁殖習性が特殊なため、業者、愛好家による乱獲が産卵環境の消失に結びつき、個体群の減少をもたらしていると考えられる。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 捕獲・狩猟(41) 自然災害(55)

参考文献

山上将史・中衛洋行・小野寺慎吾, 2008. 愛知県産コガタブチサンショウウオの産卵場所における卵嚢と雄成体の観察例. 爬虫両棲類学会報, 2008: 99-101.
Tominaga, A., M. Matsui, S. Tanabe and K. Nishikawa, 2019. A revision of *Hynobius stejnegeri*, a lotic breeding salamander from western Japan, with a description of three new species (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). Zootaxa, 4651: 401-431.

執筆: 松井正文(京都大学名誉教授)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

イヨシマサンショウウオ

日本固有種

Hynobius kuishiensis Tominaga, Matsui, Tanabe & Nishikawa, 2019

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

頭胴長 52~70mm。背面は、多くの地域では紫褐色地に銀白色の斑紋や斑点が散在するが、石鎚山系から東赤石山系では褐色地に黄白色の斑紋をもつ。遺伝的にはツルギサンショウウオやコガタブチサンショウウオと近縁で、それらと形態的に酷似する個体がいる。落葉広葉樹林や針葉樹林内の谷沿いの林床の倒木下や砂礫中に生息し、5~6月に湧水中で産卵する。卵嚢は紐状で長さは80~120mm、一腹卵数は17~27個。

分布域・生息地・個体数の現況

四国(徳島県、愛媛県、高知県)の山地に分布する。生息範囲は標高 600m 以上の主に自然林である。林道や堰堤の建設、大雨等による斜面の崩落、入山しやすい山域における採集圧、シカの増加による林床環境の変化などが生存を脅かしている。源流部に広く分布するため、個体数の把握は困難である。

随時見直しの評価理由

従来、コガタブチサンショウウオとされていたが、種の細分化に伴い 2019 年 8 月に新種記載された。分布域が四国の限られた山域のみであることに加え、繁殖習性が特殊なため、業者、愛好家による乱獲が産卵環境の消失に結びつき、個体群の減少をもたらしていると考えられる。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 捕獲・狩猟(41) 自然災害(55)

参考文献

Tominaga, A., M. Matsui, S. Tanabe and K. Nishikawa, 2019. A revision of *Hynobius stejnegeri*, a lotic breeding salamander from western Japan, with a description of three new species (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). *Zootaxa*, 4651: 401-433.

執筆: 田辺真吾(日本爬虫両棲類学会会員)・松井正文(京都大学名誉教授)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): VU(種分離による再評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

カスミサンショウウオ

日本固有種

Hynobius nebulosus Temminck & Schlegel, 1838

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

体は大型で(オス全長 84~119mm、平均 98mm)、前後肢ともに比較的短く前肢に対する後肢の割合は中程度。尾は短く常に上下縁に明瞭な黄色の条線がある。ツシマサンショウウオ、ヤマグチサンショウウオと姉妹群をなし、この群とイワミサンショウウオ、オキサンショウウオが単系統をなす。ヤマグチサンショウウオより頭胴長が大きくて鋤骨歯列幅が狭い。

分布域・生息地・個体数の現況

九州の北西部および、近隣の島嶼から知られる。既知の産地の標高は 15~670m、平均 113.5m。

随時見直しの評価理由

2019 年 2 月にカスミサンショウウオが分割され、7 新種が記載され、1 種が別種として異名から復活した。その結果本種の生息範囲は九州北西部に限定された。すでに砂防ダムの建設、道路建設、森林伐採等の開発による生息環境の悪化、産卵環境の消失があったことに加え、販売(ネット上での売買)、飼育目的の業者、愛好家による乱獲が近年特に顕著である。

存続を脅かす要因

湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 土地造成(23) 水質汚濁(31) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54) その他(71)

参考文献

Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current Herpetology*, 38: 32-90.

執筆: 松井正文(京都大学名誉教授)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

チクシブチサンショウウオ

日本固有種

Hynobius oyamai Tominaga, Matsui & Nishikawa, 2019

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

福岡、大分、熊本の各県に生息。成体の頭胴長は 65~89mm。背面は青紫色で通常、斑紋を欠くが、銀白色の斑紋を有するものもいる。側面、腹部には銀白色から白色の斑紋を持つ。3月から6月初旬に山地溪流で繁殖。卵嚢は三日月型。卵径は4.7~6.3mm、一腹卵数は17~55個。幼生は孵化した年の秋までに変態するが、一部は幼生越冬する。地域によってはコガタブチサンショウウオと混生する。

分布域・生息地・個体数の現況

福岡県東部、大分県北部、熊本県北部の山地に分布する。生息地はスギ植林地から広葉樹林の源流域であり、低地性の種に比べて開発に関する影響は少ないが、一部の地域でダムや砂防ダムの建設、林道の整備、森林伐採で生息地や産卵環境が減少しつつある。また、ペットとして飼育、販売目的で採集されており、その影響が懸念される。

随時見直しの評価理由

2019年1月にブチサンショウウオから分割され、新種記載された。記載論文の内容から、本種の生息範囲は九州北東部に限定された。従来の砂防ダムの建設、道路建設、森林伐採等の開発による生息環境の悪化、産卵環境の消失に加え、販売(ネット上での売買)、飼育目的の業者、愛好家による乱獲が近年特に顕著である。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 道路建設(24) ダム建設(25) 捕獲・狩猟(41)

参考文献

Tominaga, A., M. Matsui and K. Nishikawa, 2019. Two new species of lotic breeding salamanders (Amphibia, Caudata, Hynobiidae) from western Japan. *Zootaxa*, 4550: 525-544.

倉本満他, 2014. ブチサンショウウオ, 福岡県環境部自然環境課(編) 福岡県の希少野生生物, p. 31. 福岡.

執筆: 富永 篤(琉球大学)・松井正文(京都大学名誉教授)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

チュウゴクブチサンショウウオ

日本固有種

Hynobius sematonotos Tominaga, Matsui & Nishikawa, 2019

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

岡山・鳥取以西の中国地方各県に生息。頭胴長は 58~82mm。背面は赤紫から青紫色で通常、灰色から茶白色の斑紋を持つ。側面、腹部にも白色の斑紋を持つ。4月から6月に山地溪流で繁殖。卵嚢は三日月型。卵径は4.7~5.7mm、一腹卵数は11~39個。幼生は全長で38.5~50.0mmに達し、孵化した年の秋までに変態するが、一部は幼生越冬する。地域によってはヒダサンショウウオ、ヒバサンショウウオと混生する。

分布域・生息地・個体数の現況

岡山県、鳥取県以西の中国地方の山地に分布する。生息地はスギ植林地から広葉樹林の源流域であり、低地性の種に比べて開発に関する影響は少ないが、一部の地域でダムや砂防ダムの建設、林道の整備、森林伐採で生息地や産卵環境が減少しつつある。また、ペットとして飼育、販売目的で採集されており、その影響が懸念される。

随時見直しの評価理由

2019年1月にブチサンショウウオから分割され、新種記載された。記載論文の内容から、本種の生息範囲は中国地方に限定された。従来の砂防ダムの建設、道路建設、森林伐採等の開発による生息環境の悪化、産卵環境の消失に加え、販売(ネット上での売買)、飼育目的の業者、愛好家による乱獲が近年特に顕著である。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 道路建設(24) ダム建設(25) 捕獲・狩猟(41)

参考文献

Tominaga, A., M. Matsui and K. Nishikawa, 2019. Two new species of lotic breeding salamanders (Amphibia, Caudata, Hynobiidae) from western Japan. *Zootaxa*, 4550: 525-544.

執筆: 富永 篤(琉球大学)・松井正文(京都大学名誉教授)

セトウチサンショウウオ

Hynobius setouchi Matsui, Okawa, Tanabe & Misawa, 2019

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

体は小型(オス全長 78~104mm、平均 92mm)、四肢は比較的長く、ほとんど常に第 5 趾をもつ。尾は長く、上下縁には通常黄色の条線を欠く。卵囊外被には条線がない。トウキョウサンショウウオ及びヤマトサンショウウオのなす系統と単系統群をなす。ヤマトサンショウウオより鋤骨歯列が大きく、サンインサンショウウオより頭胴長が小さく、胴と鋤骨歯列が長く、肋皺の数が多く、頭が短い。

分布域・生息地・個体数の現況

これまで近畿地方西部、中国地方東部、四国東部(大阪府、和歌山県、兵庫県、岡山県、広島県、香川県、徳島県)から知られる。大阪府南部ではヤマトサンショウウオと、広島県尾道市ではアキサンショウウオと側所的に分布する。各地で繁殖場所の乾燥化などが生じて個体数は減少している。生息地が道路工事や宅地造成のために削られたり、埋められたり、圃場整備によって水が出なくなったりすることにより容易に絶滅する恐れがある。

随時見直しの評価理由

2019 年 2 月にカスミサンショウウオから分割され、新種記載された。生息範囲は本州西部と四国の一部に限定される。すでに道路建設、耕作放棄による生息環境の悪化、産卵環境の消失があったことに加え、販売(ネット上での売買)、飼育目的の業者、愛好家による乱獲が近年特に顕著である。

存続を脅かす要因

湖沼開発(12) 草地開発(16) 土地造成(23) 道路建設(24) 交通事故(26) 水質汚濁(31) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による) (52-3) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54) 近親交配(62) その他(71)

参考文献

Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current Herpetology*, 38: 32-90.

執筆: 松井正文(京都大学名誉教授)

コガタブチサンショウウオ

Hynobius stejnegeri Dunn, 1923

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

長崎・佐賀を除く九州の各県に生息。頭胴長は 51~72mm。背面は赤紫から暗褐色で白色から茶白色の斑紋を持つ。側面、腹部には白色の斑紋を持つ。4~5 月に源流部の伏流水中で繁殖。卵囊は紐状。卵径は 4.6~5.0mm、一腹卵数は7~19 個。幼生は、卵黄のみで成長し、孵化した年の夏に変態する。九州北部でチクシブチサンショウウオ、中南部で、ベッコウサンショウウオまたはノボサンショウウオと混生する。

分布域・生息地・個体数の現況

一部地域では減少傾向が見られる。具体的に懸念される脅威としては砂防ダムの建設、道路建設、森林伐採等の開発による生息環境の悪化、産卵環境の消失に加え、販売、飼育目的の採集が考えられる。

随時見直しの評価理由

2019 年 8 月にコガタブチサンショウウオからマホロバサンショウウオ、ツルギサンショウウオ、イヨシマサンショウウオが分割され、新種記載されたことにより、本種の生息範囲は九州に限定された。分布域がこれまでより小さくなったことに加え、従来の砂防堰堤、林道の建設、森林伐採等の開発による生息環境の悪化、水質汚濁、販売、飼育目的の業者、愛好家による乱獲が顕著であるため随時見直しによる評価を行う。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 道路建設(24) ダム建設(25) 捕獲・狩猟(41)

参考文献

Tominaga, A., M. Matsui, S. Tanabe and K. Nishikawa, 2019. A revision of *Hynobius stejnegeri*, a lotic breeding salamander from western Japan, with a description of three new species (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). *Zootaxa*, 4651: 401-431.

執筆: 富永 篤(琉球大学)・松井正文(京都大学名誉教授)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

ヒバサンショウウオ

日本固有種

Hynobius utsunomiyaorum Matsui & Okawa, 2019

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

体は小型(オス全長 72~103mm、平均 93mm)、前肢は比較的短く、後肢は中程度の長さ。ハクバサンショウウオと遺伝的に非常に近く、アキサンショウウオと単系統群をなす。アキサンショウウオより前後肢の会合程度が大きく、鋤骨歯列と第 5 趾が短い。一部個体群を除き、第5趾を欠くか痕跡的。鋤骨歯列は比較的短い。体色には大きな変異がある。尾に黄色の条線を欠く。

分布域・生息地・個体数の現況

これまで中国山地の脊梁山地(兵庫県、岡山県、広島県、鳥取県、島根県)から知られる。既知の産地の標高は 35~1,216m で平均は 350m。低地では湿地の遷移や、耕作放棄による乾燥化で繁殖場が減少している。山地では、林道や林道工事などで断ち切られた湧水中にも産卵・生育するが、側溝の設置などで繁殖場所が失われることもあるし、大規模な森林伐採が行われると絶滅の可能性がある。

随時見直しの評価理由

2019年2月にカスミサンショウウオから分割され、新種記載された。生息範囲は本州西部に限定される。すでに砂防ダムの建設、道路建設、森林伐採等の開発による生息環境の悪化、産卵環境の消失があったことに加え、販売(ネット上での売買)、飼育目的の業者、愛好家による乱獲が近年特に顕著である。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 湿地開発(15-1) 土地造成(23) 道路建設(24) 水質汚濁(31) 捕獲・狩猟(41) 遷移進行・植生変化(54) 自然災害(55)

参考文献

Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current Herpetology*, 38: 32-90.

執筆: 松井正文(京都大学名誉教授)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

有尾目サンショウウオ科

【両生類】

ヤマトサンショウウオ

日本固有種

Hynobius vandenburghi Dunn, 1923

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

体は大型(オス全長 73~126mm、平均 95mm)。四肢は比較的短く、尾の上下縁には通常、黄色の条線がある。トウキョウサンショウウオと姉妹群をなし、この群はセトウチサンショウウオと姉妹群をなす。セトウチサンショウウオに比べ鋤骨歯列が短く、サンインサンショウウオに比べ尾と前後肢間が長く、肋鱗の数が多く、頭が小さく、眼窩間と尾幅が狭く、後肢が短く、前後肢の重なりが少ない。

分布域・生息地・個体数の現況

近畿地方東部と中部地方南部地域(奈良県、滋賀県、京都府、大阪府、愛知県、岐阜県)から知られる。かつて奈良県や愛知県で個体群絶滅の例があったが、現在も各種開発による生息地の消滅および圃場整備に伴う水路の改変、早春繁殖期の乾田化、アメリカザリガニによる卵嚢捕食などにより各地で減少している。

随時見直しの評価理由

2019年2月にカスミサンショウウオの細分化に伴って、独立種としての位置が復活した。生息範囲は本州中部に限定される。大規模な土地開発による生息地の消失と、それにとまなう汚水の流入などの水質悪化、減反による水田の乾燥化が最大の脅威となってきた。ペットとしての捕獲・採取も頻繁に行われている。アメリカザリガニの他、地域によっては外来の捕食性魚類も本種の生存を脅かしている。

存続を脅かす要因

湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 草地開発(16) 土地造成(23) 道路建設(24) 水質汚濁(31) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54)

参考文献

Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current Herpetology*, 38: 32-90.

執筆: 松井正文(京都大学名誉教授)

ヒダサンショウウオ

Hynobius kimurae Dunn, 1923

カテゴリー判定基準: b) c)

基礎情報

南部を除く中部地方から中国地方にかけて、山地森林の小さな溪流付近で生活する。頭胴長 58~95mm。鋤骨歯列は深い U 字型で、尾は円筒形。背面は紫褐色で黄色の斑点があり、腹面には斑点がない。2~4 月頃に源流近くの水中で岩石下面に虹色光沢のある強靱な卵囊対を産み付ける。ヒガシヒダサンショウウオと遺伝的に大きく異なる。マホロバサンショウウオ、チュウゴクブチサンショウウオと混生する地域もある。

分布域・生息地・個体数の現況

一部地域で減少している。林道工事や治山事業に伴う側溝の設置により、落下乾燥死する例があったが、近年はニホンジカの食害による森林荒廃、風力発電開発などに加え、特に小雨による溪流の渇水、台風接近に伴う豪雨などによる溪流への土砂流失や倒木の増加による生息環境の悪化が深刻である。

随時見直しの評価理由

これまで本種の一部とされていた関東-中部南部産個体群がヒガシヒダサンショウウオとして新種記載され、本種の分布域が減少したことに加え、自然災害の増加などによる生息環境の悪化が個体群の縮小を促していると考えられるため。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) スキー場(22) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 交通事故(26) 水質汚濁(31) 捕獲・狩猟(41) 捕食(在来種による)(52-4) 自然災害(55) 競争(外来種による)(56-1)

参考文献

Okamiya, H., H. Sugawara, M. Nagano and N. A. Poyarkov, 2018. An integrative taxonomic analysis reveals a new species of lotic *Hynobius* salamander from Japan. PeerJ, 6: e5084.

金森さりい・亀崎直樹・見澤康充・西川完途・松井正文, 2018. ヒダサンショウウオに見られた皮膚結節症について. 爬虫両棲類学会報, 2018: 114.

執筆者: 松井正文(京都大学名誉教授)・見澤康充(建設環境研究所)

【昆虫類】

■補遺資料掲載種一覧

和名		学名		RL カテゴリー	
RL2019(旧)	RL2020	RL2019(旧)	RL2020	2019	2020
—	タイワンタイコウチ	—	<i>Laccotrephes grossus</i>	—	CR
ニセコケシゲンゴロウ	ニセコケシゲンゴロウ	<i>Hyphydrus orientalis</i>	<i>Hyphydrus orientalis</i>	DD	CR
—	ガマアシナガアリ	—	<i>Aphaenogaster gamagumayaa</i>	—	CR
アサギリヨトウ	アサギリヨトウ(キシダムラサキヨトウ)	<i>Sideridis incommoda</i>	<i>Sideridis incommoda</i>	VU	CR
—	コフキオオメトンボ	—	<i>Zyxomma obtusum</i>	—	EN
—	ニセトガリヨトウ	—	<i>Virgo confusa</i>	—	NT
—	マホロバキシタバ	—	<i>Catocala naganoi mahoroba</i>	—	DD

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):なし

カメムシ目タイコウチ科

【昆虫類】

タイワンタイコウチ

Laccotrephes grossus (Fabricius, 1787)

カテゴリー判定基準:B-1,3

基礎情報

タイコウチよりやや大きく、呼吸管を除いた体長は 34~37mm で、前脚腿節基部に大棘を欠く。東南アジアに広く分布するが、日本では八重山諸島の石垣島、西表島、与那国島に分布する。水田や池沼などの浅い開放水域にみられ、平坦な泥底を好む。捕食肉食性で、発達した前脚で水生小動物を捕獲する。成虫はほぼ一年中みられ、はっきりとした周期性は見られない。

分布域・生息地・個体数の現況

2010 年以降は激減し、与那国島では 2016 年を最後に生息を確認できておらず、西表島でも 2018 年調査で確認できた水域を含めて 2019 年春以降は再発見できていない。また、石垣島では 10 年程前の目撃以来見つかっていない。いずれの地域(島)でも絶滅の危機がきわめて高い状況となっている。

なお与那国島では、別の小型種エサキタイコウチが分布しており、本来は水路や湿地的環境(むしろ閉鎖的水域)に限定していたものが、最近になって水田などのタイワンタイコウチの生息環境にまで拡大しつつある。このことは、競争種が不在となったためと考えられ、タイワンタイコウチの危機的状況を表していると推定される。

随時見直しの評価理由

開放的な陸水域の減少により、近年減少傾向にあった。もともと記録がほとんどない石垣島は別として、2000 年代前半からは西表島でのさらなる減少傾向がみられ、とくに普通に見られた与那国島での減少が目立っていた。

池の埋め立てや水田の放棄に加え、2014 年以降の度々の干ばつによって多くの陸水域は枯渇し、与那国島でさえも本種を確認することができなくなった。その後も個体数が回復する兆しはなく、2018 年度に実施した環境省レッドリスト見直しに係る現地調査でも、梅雨時でも降雨はほとんどなく、陸水域の水面は消失または面積の激減が認められた。本調査を通して、西表島でわずか 1 か所のみで見つかっただけで、与那国島では未確認であった。その後の継続調査でも与那国島で確認できず、西表島でも再確認できていない。

存続を脅かす要因

湖沼開発(12) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 農薬汚染(32) 管理放棄(53) 局所分布(61)

参考文献

北野忠・河野裕美, 2014. 西表島において絶滅もしくは減少傾向にある大型水生昆虫. 西表島研究, 2013: 37-44.
 沖縄県環境部自然保護課, 2017. 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物第 3 版(動物編)ーレッドデータおきなわー, 沖縄県環境部自然保護課, 那覇. 712pp.

執筆: 林 正美(埼玉大学名誉教授)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):DD

コウチュウ目ゲンゴロウ科

【昆虫類】

ニセコケシゲンゴロウ

Hyphydrus orientalis Clark, 1863

カテゴリー判定基準:B-1,3

基礎情報

体長は 3.8-4.5 mm。体は短卵形。背面は黄褐色～赤褐色で、上翅には複雑な暗褐色紋がある。本土に分布するケシゲンゴロウによく似ているが、雄交尾器の形状で区別できる。

国外では台湾および中国に分布し、国内では本州(静岡県浜松市)、沖縄県(沖縄島・西表島・黒島・与那国島)のみで確認されている。放棄水田や牧場の水飲み場、水深の浅い池など開放的な止水域に生息する。生活史は不明である。

分布域・生息地・個体数の現況

浜松市においては、小規模な池 1 か所で確認されていた(北野ほか 2000)が、2001 年以降確認できない。沖縄島では文献による情報はあっても、具体的な記録を見つけることができず、また現在も全く確認されていない。西表島では、文献上に 1989 年の古い記録があるのみで(松井 1990)、その後の調査でも得られていない(例えば北山 1991、北野ほか 2011 など)。黒島での現状は不明である。与那国島では、過去に複数の記録があるが(例えば松井 1990、阿部 1991、野村・紙谷 1994)、2016 年以降の記録を最後に、北野らによる調査などでは全く確認できない。

随時見直しの評価理由

国内では沖縄県(沖縄島・西表島・黒島・与那国島)および本州(静岡県)に分布する種で、もともと産地は限られていた。比較的記録の多かった与那国島でも 2016 年の記録(未発表)を最後に確認できない状況にあり、そのほかの地域においても、現在、確実な生息地が存在しないことが明らかとなった。本種はこれまで DD とされていたが、生息状況が明らかになってきたことから評価の見直しをするに至った。

存続を脅かす要因

湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 農薬汚染(32) 管理放棄(53) 自然災害(55)

参考文献

北野忠, 2017. ニセコケシゲンゴロウ, 沖縄県環境部自然保護課(編)改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物第 3 版(動物編)ーレッドデータおきなわ

-, p. 376. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
 北野忠・記野直人・長谷川洋・北山昭, 2000. 静岡県浜松市松島町におけるゲンゴロウ類の採集記録—本州初記録のニセコケシゲンゴロウを中心として—.
 甲虫ニュース, 129: 7-9.
 森正人・北山昭, 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ, 文一総合出版, 東京, 231pp.

執筆: 北野 忠 (東海大学)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし

ハチ目アリ科

【昆虫類】

ガマアシナガアリ

日本固有種

Aphaenogaster gamagumayaa Naka & Maruyama, 2018

カテゴリー判定基準: B-1.2, C2b

基礎情報

世界で2例目の確実な洞窟性のアリであり、複眼の縮小、色素が退化、脚や触角が長いなど、洞窟性種としての特徴を持っている。沖縄島中部の1か所の洞窟(鍾乳洞)からしか見つかっておらず、コウモリの糞を運ぶ様子が観察されている以外、生態はほとんど不明であり、生殖虫も発見されていない。洞窟はきわめて湿潤で、本種の生息には湿潤な暗闇が不可欠と思われる。

分布域・生息地・個体数の現況

1か所の洞窟で1コロニーだけしか見つかっておらず、巣の周辺で10個体前後の働きアリが見つかっているのみである。また沖縄島の他の入洞可能な洞窟は、くまなく調査したもの、発見されておらず、本洞窟の石灰岩地帯の狭い範囲の固有種である可能性が高い。

随時見直しの評価理由

沖縄島中部にある一か所の洞窟(鍾乳洞)からしか発見されておらず、周辺一帯の洞窟でも見つかっていない。また、これまでに1巣しか発見されていない。唯一の既知産地である洞窟も近隣地域の開発による影響が懸念されるほか、興味本位の収集家に採集されてしまう恐れもあるため、早急な保全対策が必要である。

存続を脅かす要因

洞窟の消失や環境悪化(18) 捕獲・狩猟(41) 人の踏みつけ(51)

参考文献

Naka, T. and Maruyama, M., 2018. *Aphaenogaster gamagumayaa* sp. nov.: the first troglotic ant from Japan (Hymenoptera: Formicidae: Myrmicinae). Zootaxa, 4450: 135-141.

執筆: 丸山宗利 (九州大学総合研究博物館)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): VU

チョウ目ヤガ科

【昆虫類】

アサギリヨトウ (キシダムラサキヨトウ)

日本固有種

Sideritis incommoda Staudinger, 1888

カテゴリー判定基準: A-2, B-1,3

基礎情報

開張 28 mm~32 mm。前翅地色は鉛色。後翅は淡褐色。ヒメムラサキヨトウに類似するが、前翅の内横線が強く外側に傾斜しより滑らかであることから区別される。国内では静岡県富士宮市が唯一の産地。国外では朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部に分布する。年1化で、成虫は8月に発生する。食餌植物はヨモギ(キク科)が判明している。和名について、これまでアサギリヨトウを使用してきたが、本種の国内での発見報告(吉本 1990)の際に新称されたキシダムラサキヨトウを併記し、アサギリヨトウ(キシダムラサキヨトウ)とした。

分布域・生息地・個体数の現況

分布域の現況について、既知産地である静岡県富士宮市朝霧高原根原地区のみ。新産地などの追加はない。草原(草地管理されている草原)は約50~60ヘクタールほど。

生息地の現況について、ススキ草原を中心にヒノキ植林地、耕作地等が見られ、これまで草刈りや火入れが行われることで環境が維持されてきたが、近年、これらの草地管理が不十分になりつつあり、生息環境である草原の維持が難しい状態にある。一方で朝霧高原のススキ景観の保全と自然植生の復元を目的に、火入れなど行う環境保全事業(朝霧高原根原地区火入れ事業)も実施されている。

個体数の現況について、最近10年で確認記録が無く、本種を対象とした2017年と2018年の環境省レッドリスト見直しに係る調査においても確認する事ができなかった。

随時見直しの評価理由

本種は、国内では静岡県富士宮市朝霧高原が唯一の生息地として知られる。草原性で年1化、成虫は8月に出現する。生息地における個体群は小さく、細々と存続している状況であると考えられ、1990年の本種発見の後、数年間は生息が確認されていたものの、最近10年以上にわたり確認されておらず、最近の知見も乏しい状況にあった。そのため最新の生息状況を把握するため、2017年と2018年の成虫発生期に朝霧高原根原地区において、延べ10回以上の調査を行ったが本種を確認する事はできず、本種の生息状況はより危ぶまれる状態になっていると推察される。

存続を脅かす要因

草地開発(16) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61)

参考文献

岸田泰則・秋葉哲男・飯森政宏・北島裕紀・阪本優介・矢野高広・神保宇嗣, 2017. 環境省の静岡県朝霧高原の調査で得られた蛾. 蛾類通信, 285: 241-246.
 阪本優介, 2018. 蛾類学会コラム 13 朝霧高原調査 2018. 日本蛾類学会ウェブサイト <http://www.moth.jp/archives/1021>. (2018年9月16日)
 吉本浩, 1990. 本州中部で発見された日本未記録種キシダムラサキヨトウ(新称)について. 蝶と蛾, 41: 185-188.

執筆: 岸田泰則(日本蛾類学会)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし

トンボ目トンボ科

【昆虫類】

コフキオオメトンボ

Zyxomma obtusum Albarada, 1881

カテゴリー判定基準: B-1,3

基礎情報

森林に囲まれた薄暗い池を好み、朝夕の黄昏れ時の短い時間にだけ活動する。そのため調査時間が限定され、情報が得られにくい面がある。時に古井戸などの小規模水域でも発生するという。日中は林内で休止することが知られている。オスは翅も含め白化するため、目立つ種類である。幼虫期間は短く年多次とされる。

分布域・生息地・個体数の現況

大東諸島: 北大東島では過去の産地での複数回の調査で確認できず、島内から絶滅した可能性が高い。南大東島では過去には広域で多産していたが、現存が確認されているのは 1-2 か所で確認数も数頭と激減していた。西表島では、既知産地では確認できなかったが、新たに 1 か所の安定産地を発見し、その後さらに 1 か所確認された。また、与那国島では本調査期間中に島初記録になる産地を発見できた。これらすべてを合わせても、現在知られる産地は、国内で 5 か所程度と危機的状況で、この中で活動時間に 10 頭以上が確認できる安定産地は 2 か所のみとなっている。既知産地の中で、生息地の環境そのものが埋め立てや護岸で破壊された箇所はなく、見かけの変化はほとんどないこと(本種は樹陰の多い池に生息するため、池の管理放棄などによる影響は考えにくい)と、池が農地に接する場所が多いため、減少要因は農薬が主要因である可能性が高い。

随時見直しの評価理由

本種は、東南アジアに広く分布する種であるが、国内では大東諸島にのみ定着していた。1990 年台後半に、西表島とその周辺の島々で記録されるようになった(これらは台湾から飛来した個体群の可能性が高い)。一時は西表島島内では広く記録されたが、2010 年台に入り、大東諸島、西表島の個体群が急減したという情報が寄せられた。そこで、2017 年から環境省レッドリスト見直しに係る現地調査に着手した。その結果、新産地は確認されるなどしたものの、確認された産地はごくわずかで、個体数も安定している場所はごくわずかであった。もともと産地数はごく限られるものの、大東諸島での発生が安定していたため、これまでレッドリストでは扱ってこなかったが、生息基盤が大きく揺らいでおり、国内絶滅のリスクが高いことが明らかになったため、評価を行った。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 農薬汚染(32) 捕獲・狩猟(41) 捕食(外来種による)(52-3) 自然災害(55)

参考文献

苅部治紀・林正美・北野忠, 2019. 与那国島からコフキオオメトンボを初確認. TOMBO, 61: 55-56.
 北野忠・神田雅治・井上 太之・苅部治紀, 投稿中. 西表島における 2010 年代後半のコフキオオメトンボの記録. 西表島研究(東海大学沖縄地域研究センター一報), 2018.

執筆: 苅部治紀(神奈川県立生命の星・地球博物館)

NT

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし

チョウ目ヤガ科

【昆虫類】

ニセトガリヨトウ

Virgo confusa Kishida & Yoshimoto, 1991

日本固有種

カテゴリー判定基準: a) b)

基礎情報

開張 23 mm~27 mm. 前翅地色は褐色から濃い赤紫色で斑紋がある。後翅は淡褐色。同属の別種トガリヨトウに類似するが、前翅斑紋の色調の差異や雌雄の交尾器の形状から区別される。平地から低山地の草原に生息し、成虫は 8 月~10 月に確認されている。年 1 化と推定され、食餌植物は不明。

分布域・生息地・個体数の現況

北海道南部から九州にかけて分布するが、健全な生息地は減少していると考えられる。
 生息地である草地が管理放棄や開発などにより全国的に減少している。かつて多産地であった朝霧高原ではススキ草原をおもにヒノキ植林地、耕作地等が見られ、これまで草刈りや火入れが行われることで環境が維持されてきたが、近年、これらの草地管理が不十分になりつつあり、生息環境である草原の維持が難しい状態にある。一方で朝霧高原のススキ景観の保全と自然植生の復元を目的に、火入れなど行う環境保全事業(朝霧高原根原地区火入れ事業)も実施されている。

本種の多産地として知られる静岡県富士宮市朝霧高原において 2017 年と 2018 年の調査が行われたが本種について両年ともに確認する事ができなかった。このため近年の草原環境を取り巻く現状から他産地においても同様に減少傾向にあると考えられる。

随時見直しの評価理由

本種は、北海道南部から九州にかけて分布する日本固有種で、平地から低標高山地に生息する。草原性の蛾で、年 1 化、成虫は 8 月から 10 月に確認されている。静岡県富士宮市朝霧高原は本種の多産地として知られているが、2017 年と 2018 年の成虫発生期に朝霧高原根原地区において、延べ 10 回以上の調査を行ったが本種を確認する事はできず、近年の草原環境を取り巻く現状から、他産地においても同様に既知産地における個体群は減少傾向にあると推察される。

存続を脅かす要因 草地開発(16) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54)

参考文献

岸田泰則・吉本浩, 1991. 日本および台湾産トガリヨトウ属 (ヤガ科) の 2 新種. 蝶と蛾, 42: 107-113.
 岸田泰則・秋葉哲男・飯森政宏・北島裕紀・阪本優介・矢野高広・神保宇嗣, 2017. 環境省の静岡県朝霧高原の調査で得られた蛾. 蛾類通信, 285: 241-246.
 阪本優介, 2018. 蛾類学会コラム 13 朝霧高原調査 2018. 日本蛾類学会ウェブサイト <http://www.moth.jp/archives/1021>. (2018 年 9 月 16 日)

執筆者: 岸田泰則(日本蛾類学会)

DD

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし

チョウ目ヤガ科

【昆虫類】
日本固有種

マホロバキシタバ

Catocala naganoi mahoroba Ishizuka & Kishida, 2019

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

開張 51.7 mm ~ 63 mm. 前翅は灰褐色や暗褐色からなる斑紋があり、全体的に淡緑がかかる。後翅地色は黄褐色で、太い黒色帯状斑紋がある。国内の種では同属の別種アミメキシタバに類似するが、前翅裏面及び後翅表面の斑紋の差異から区別できる。成虫は 7 月上旬から発生し、クヌギ、コナラの樹液に飛来し吸汁する。他の *Catocala* 属と同じく年 1 化と推定され、食餌植物は不明。

分布域・生息地・個体数の現況

分布域の現況として、現在生息が確認されているのは、タイプ産地である奈良県春日野町の春日山原始林のみ。それ以外の場所からの生息情報や標本は確認されておらず新産地などの追加はない(2019 年 12 月現在)。推定生息範囲は春日山原始林約 250 ヘクタールほどと考えられる。

生息地の現況として、主な生息地と考えられる春日山原始林は、特別天然記念物に指定され、保護されているものの、その周辺部では昆虫類の採取が規制されていない地域を含んでおり、今後愛好家による本種への採集圧の増加が懸念される。

個体数の現況として、発見後の調査においても、追加個体が得られており現在のところ個体群は安定していると考えられる。

随時見直しの評価理由

本種は、2019 年に奈良県春日野町において発見され、台湾に分布するキリタチキシタバ *Catocala naganoi* の亜種として記載された。現在、タイプ産地以外の場所からの生息情報や標本は確認されておらず、また大型の蛾類であること、本種を含む *Catocala* 属は蛾類の中でも愛好家が多く注目度の高いグループであるにもかかわらず、これまで本種が発見されなかったことから、国内において局所的な分布をしている種と考えられる。本種に関する生態情報や生息状況については未解明な部分が多い一方で、本種が所属する *Catocala* 属は美麗種を多く含みコレクション性が高く、本種においても既知産地における捕獲圧の集中による個体数の減少が懸念される。

存続を脅かす要因 森林伐採(11) 捕獲・狩猟(41) 局所分布(61)

参考文献

Sugi, S., 1965. Illustrations of the Taiwanese *Catocala* with descriptions of two new species. 蝶と蛾, 32: 147-159.
 石塚勝己・岸田泰則, 2019. 日本から 32 種目のカトカラ, マホロバキシタバ. 月刊むし, 584: 7-12.

執筆者: 岸田泰則(日本蛾類学会)

【貝類】

■補遺資料掲載種一覧

和名		学名		RL カテゴリー	
RL2019(旧)	RL2020	RL2019(旧)	RL2020	2019	2020
マメタニシ	マメタニシ	<i>Parafossarulus manchouricus japonicus</i>	<i>Parafossarulus manchouricus japonicus</i>	VU	CR
—	タクミニナ	—	<i>Mathilda sinensis</i>	—	CR
—	カワコザラ	—	<i>Ferrissia nipponica</i>	—	CR
—	クメジマキセルモドキ	—	<i>Luchuena sp.</i>	—	CR
—	ナタメギセル(小型)※	—	<i>Stereophaedusa sp. (Sm)</i>	—	CR
イケチョウガイ	イケチョウガイ	<i>Sinohyriopsis schlegeli</i>	<i>Sinohyriopsis schlegelii</i>	CR+EN	CR
カラスガイ	カラスガイ	<i>Cristaria plicata</i>	<i>Cristaria plicata</i>	NT	EN
ハンミガキゴマガイ	ハンミガキゴマガイ	<i>Diplommatina nishii</i>	<i>Diplommatina nishii</i>	NT	EN
リュウキュウキセルガイモドキ	リュウキュウキセルモドキ	<i>Luchuena luchuana</i>	<i>Luchuena luchuana</i>	NT	EN
キカイキセルガイモドキ	キカイキセルモドキ	<i>Luchuena reticulata</i>	<i>Luchuena reticulata</i>	NT	EN
アズマギセル	アズマギセル	<i>Stereophaedusa azumai</i>	<i>Stereophaedusa azumai</i>	VU	EN
トクネニヤダマシギセル	トクネニヤダマシギセル	<i>Stereophaedusa caudata</i>	<i>Stereophaedusa caudata</i>	CR+EN	EN
—	ナタメギセル(北部大型)※	—	<i>Stereophaedusa sp. (NL)</i>	—	EN
—	ナタメギセル(南部大型)※	—	<i>Stereophaedusa sp. (SL)</i>	—	EN
トクノシマケハダシクチマイマイ	トクノシマケハダシクチマイマイ	<i>Moellendorffia tokunoensis</i>	<i>Moellendorffia tokunoensis</i>	CR+EN	EN
トクノシマビロウドマイマイ	トクノシマビロウドマイマイ	<i>Nipponochloritis obscura</i>	<i>Nipponochloritis obscura</i>	CR+EN	EN
—	キュウシュウササノハガイ	—	<i>Lanceolaria kihirai</i>	—	EN
オグラヌマガイ	オグラヌマガイ	<i>Sinanodonta ogurae</i>	<i>Sinanodonta tumens</i>	CR+EN	EN
—	クロツノナメクジ	—	<i>Deroceras sp.</i>	—	VU
—	シズオカマイマイ	—	<i>Satsuma sp.</i>	—	VU
—	メンカラスガイ	—	<i>Cristaria clessini</i>	—	VU
トンガリササノハガイ	ササノハガイ	<i>Lanceolaria grayii</i>	<i>Lanceolaria oxyrhyncha</i>	NT	VU
コシキジマギセル	コシキジマギセル	<i>Stereophaedusa koshikijimana</i>	<i>Stereophaedusa koshikijimana</i>	VU	NT
—	ナタメギセル(偽南部大型)※	—	<i>Stereophaedusa sp. (pSL)</i>	—	DD
ダイトウジママイマイ	削除	<i>Satsuma mercatoria daitojimaensis</i>	削除	NT	削除
スジイリカワコザラガイ	削除	<i>Laevapex japonicus</i>	削除	DD	削除

※ナタメギセル *Stereophaedusa ophidoon*(VU)が分離されて評価

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): VU

新生腹足目エゾマメタニシ科

【貝類】

日本固有亜種

マメタニシ

Parafossarulus manchouricus japonicus (Pilsbry, 1901)

カテゴリー判定基準: B-1,3

基礎情報

殻長約 12 mm、殻径約 8 mm、卵円錐形、厚く不透明、螺層はよく膨らみ、縫合は浅い。殻表は象牙色で、太い螺肋を巡らす。その強さや本数は個体(群)間で変異が大きく、全く平滑な場合もある。殻口は種子形でわずかに肥厚する。蓋は厚い石灰質で同心成長脈をもつ。Itagaki (1965) が内部形態を詳細に記載している。*Clonorchis sinensis* (Cobbold 1875) 肝吸虫の第一中間宿主。平野部の水田や用水路、池沼など止水または緩い流水の軟泥底に棲む。

分布域・生息地・個体数の現況

最北の記録は秋田県能代潟で、宮城、群馬、千葉、茨城、埼玉、新潟、長野、富山、石川、愛知、三重、岐阜、滋賀、京都、大阪、兵庫、和歌山、香川、徳島、岡山、広島、山口、福岡、佐賀の各府県から記録があるが、このうち 2000 年以降で棲息が確認されたのは滋賀、大阪、兵庫、和歌山、岡山、山口、佐賀各府県と大分県臼杵市(新産地)に限られる。主要な棲息環境である平野部の水田や溜池などが 1960 年代以降の都市化でことごとく失われ、また農業や排水などによる水質・土壌の汚濁も打撃を与えたとみられる。

随時見直しの評価理由

第4次レッドリストでは絶滅危惧 II 類(VU)とされているが、2000 年以降に全国各地で調査した結果、文献上にある産地の 8 割以上で再発見されず、大半の個体群が消滅したことが判明した。杉原(1979)が記録した 2 府 16 県 74 箇所のうち、現在も比較的まとまって産出するのは琵琶湖周辺と岡山県南部に限られ、それ以外で生貝が確認されたのは大阪・和歌山・兵庫・山口・佐賀各県各 1 箇所と、大分県の新産地のみである。全国的に近年の急激な減少傾向が顕著で、個体群消滅率の高さは日本の淡水産貝類全種中でカワネジガイに次ぐ。したがって従来のカテゴリーは明らかに過小評価であり、早急な再評価が必要であるため随時見直し対象種とした。

存続を脅かす要因

湖沼開発(12) 河川開発(13) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 水質汚濁(31) 農薬汚染(32) 管理放棄(53) 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61)

参考文献

稲臣成一・木村道也, 1955. 岡山県下に於ける「マメタニシ」の分布及び犬猫の肝吸虫寄生状況. 岡山醫學會雑誌, 67: 651-653.

Itagaki, H., 1965. Anatomy of *Parafossarulus manchouricus* Bourguignat (Bithyniidae). Venus, 24: 169-180, pls 17-19.

杉原弘人, 1979. 日本産マメタニシの研究 (1) —日本産マメタニシの外部形態—. 関西大学社会学部紀要, 10: 57-111.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし

異種目タクミニナ科

【貝類】

タクミニナ

Mathilda sinensis P. Fischer, 1867

カテゴリー判定基準: B-1, 3

基礎情報

殻長約 10 mm、殻径約 3 mm、細長い塔形。胎殻は左巻で異旋し後成層は右巻。螺層の周縁に 2 本の螺肋を巡らし、その前後と殻底にも複数の細螺肋をもち、縦肋と交わって格子目状をなす。殻表は濃い羊糞色。蓋は角質で円い。頭部-腹足は淡黄白色の地に赤紫色の斑紋と白点を散在する。タイプ産地は中国浙江省舟山群島。ペルシャ湾で記載された *Mathilda telamonia* Melvill, 1912 は新参異名。

分布域・生息地・個体数の現況

内湾潮下帯の砂・泥底に棲むとされ、東京湾/新潟県以南、三河湾、伊勢湾、紀伊水道、瀬戸内海、久見浜湾、但馬沖、博多湾、有明海などで記録があるが、近年の生貝確認例は皆無であった。例外的に熊本県レッドデータブック(同県 2009)は有明海宇土半島沖での棲息に言及しているが実態は不明。しかし 2018 年 7 月、岡山県倉敷市児島唐琴町高洲で、沖洲のアマモ場に隣接した細砂底から生貝 1 個体が再発見された。

随時見直しの評価理由

国内での確実な生貝の記録は波部(1958)の「岡山県笠岡」が最後で、以後は信頼に足る産出報告はなく、古い死殻が稀に見られたのみのため既に 1990 年代には「絶滅もしくはそれに近い状況」とされていた。2018 年 7 月、岡山県倉敷市高洲で 60 年ぶりに生貝が発見され、内湾の砂底に棲息することが再確認された。しかし依然として日本の内湾棲腹足類中最も稀少性の高い種の一つで、1960 年代以降に国内個体群の大半が壊滅し、極端な危機的状況にある可能性が高い。したがって早急なレッドリスト評価が必要と考えられ、随時見直し対象種に挙げた。

存続を脅かす要因

海岸開発(14) 水質汚濁(31) 局所分布(61) その他(71)

参考文献

Bicler, R., 1995. Mathildidae from New Caledonia and the Loyalty Islands (Gastropoda: Heterobranchia). In Bouchet, P. (Ed.), Résultats des Campagnes MUSORSTOM, Volume 14. Mémoires du Muséum National d'Histoire Naturelle, Série A, Zoologie, 167: 595-641.

波部忠重, 1958. 日本産海産腹足類の歯舌に就いて(4). *Venus*, 20: 43-60.

熊本県希少野生動植物検討委員会, 2009. 改訂・熊本県の保護上重要な野生動植物 レッドデータブックくまもと 2009, 熊本県環境生活部自然保護課, 熊本. 597 pp.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし

貝目ヒラマキガイ科

【貝類】

カワコザラ

Ferrissia nipponica (Kuroda in S. Uchida, 1949)

カテゴリー判定基準: B-1,3

基礎情報

殻の長径約 4.5 mm、短径約 3 mm、笠形で螺塔は低く、薄質で脆い。殻表は微弱な成長脈を除き平滑、淡い黄褐色であるが付着物に覆われて黒褐色となる個体もある。北米原産の外來種で日本全国に広がっている *Ferrissia californica* (Rowell 1863) メリケンコザラに似るが、本種は前後により太短く、螺塔も低い傾向にある。淡水域の浅い止水・緩い流水中で水底の落葉などに付着する。

分布域・生息地・個体数の現況

過去の標本や文献記録から、本来は北海道から八重山諸島まで広く分布していたとみられるが、近年確認された産地は山形県酒田市や沖縄県西表島など数ヶ所にとどまり、その多くは山間部の溪流の淵や湧水など人為的改変の比較的小さい環境である。同様に全国各地で戦後の開発に伴う水源枯渇、流路変更、水質汚濁などによって急減した可能性が高い。本種とメリケンコザラの交雑の痕跡も見出され、後種の移入も大きな脅威と考えられる。国外の近縁な系統との関係は未詳。

随時見直しの評価理由

Saito et al. (2018) による分子系統解析および形態の再検討の結果、これまで「カワコザラ」とされてきた種の大半は移入種メリケンコザラの誤同定と判明した。一方、明治時代から知られていた日本在来のカワコザラはメリケンコザラとは別に確かに実在するものの、現在は主に山間の溪流など人為的攪乱の少ない環境に見られ、既知産地は数ヶ所しかない。例えば岡山県では戦前の標本があるものの再発見されず絶滅した可能性もあるなど、分布域の大半で危機的状況にある可能性が高い。したがって早急に稀少性評価が必要と考えられ、随時見直し種に挙げた。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 湖沼開発(12) 河川開発(13) 湿地開発(15-1) 圃場整備(15-2) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 水質汚濁(31) 農業汚染(32) 遷移進行・植生変化(54) 競争(外來種による) (56-1) 交雑(外來種による) (57-1) 局所分布(61)

参考文献

平瀬信太郎・黒田徳米, 1949. かはこざら, 内田清之助(編), 改訂増補 日本動物圖鑑 [再版], p. 1060. 北隆館, 東京.

齊藤匠, 2017. カワコザラ, 沖縄県環境部自然保護課(編) 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物第3版(動物編) - レッドデータおきなわ -, p. 447. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

Saito, T., V.T. Do, L. Prozorova, T. Hirano, H. Fukuda and S. Chiba, 2018. Endangered freshwater limpets in Japan are actually alien invasive species. *Conservation Genetics*, 19: 947-958.

執筆: 福田 宏(岡山大学大学院)・齊藤 匠(東邦大学)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし

貝目キセルガイモドキ科

【貝類】

クメジマキセルモドキ

日本固有種

Luchuena sp.

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻はやや太い塔型で、殻長約 21mm、殻径約9mm。殻色は淡黄白色の地に淡桃白色の不明瞭な虎斑を散在させる。風通しが良く、かつ小河川や雲霧等で空中湿度の保持された亜熱帯林でのみ生息が認められ、自然林の樹幹に生える特殊な真菌類を摂食していると推定される。本種の所属科に属する種にはハチジョウキセルモドキやチャイロキセルモドキ等絶滅に瀕している種が多く、人工繁殖はおろか数ヶ月単位の飼育も成功した報告事例はない。

分布域・生息地・個体数の現況

久米島における生息は極めて限定され、個体数も著しく少ない。2018年4月～2019年9月に実施した30地点の調査における生息確認地点数は1地点で、生息地面積は久米島の自然林面積約12km²の約30分の1以下(0.4km²)と推定された。また、近年、高頻度に来襲する暴風を伴った台風により、樹木倒壊、塩害枯死等で、林内が乾燥化しており、鳥による捕食や摂餌抑制(樹幹上の真菌類の減少)等の絶滅リスク増大も懸念される。

随時見直しの評価理由

2017年4月に沖縄県レッドデータブックで絶滅危惧 II 類にランク付けされた沖縄県久米島の固有種(未記載種)である。2017年に確認された既存産地は2産地のみで、うち1産地2018年4月の再調査では消滅しており、もう1産地も生息確認個体数が、10個体以下に留まっている。2018年4月以降、久米島において、モニタリングを実施し、約30カ所の調査において、出現地点は既存産地の1地点のみで、新産地の探索を継続しているが、2019年9月時点では見つかっていない。小島固有種で分布域が極めて狭く、個体数も著しく少なく、絶滅リスクが非常に高まっていると考えられたため、今年度随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因	森林伐採(11) 捕獲・狩猟(41) 捕食（在来種による）(52-4) 自然災害(55) 局所分布(61)
参考文献	亀田勇一, 2017. クメジマキセルモドキ, 沖縄県環境部自然保護課(編)改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物第3版(動物編)ーレッドデータおきなわー, p. 517. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇. 環境庁自然保護局, 1999. 第5回自然環境保全基礎調査植生調査報告書(全国版), 環境庁自然保護局, 東京. 346pp.

執筆: 久保弘文(沖縄県海洋深層水研究所)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

異鱗目キセルガイ科

【貝類】

日本固有種

ナタマメギセル(小型)

Stereophaedusa sp. (Sm)

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻は殻長約 9.6–12.1 mm、ずんぐりとした紡錘形で殻頂は丸い。殻口縁はよく肥厚し、内唇には強い鋸歯状の刻みがある。上板と下板は明瞭で、下軸板は唇縁に達する。他の型と比べて小型であることで区別される。地上棲で、林床の落葉や倒木下に棲息し、比較的乾燥した林にも出現する。

分布域・生息地・個体数の現況

下甌島固有。島南部の瀬尾崎周辺にのみ分布し、棲息地面積はおよそ 3.6 km²に限られる。海岸直上から尾根まで林内には広く棲息している。林床に様な密度で棲息する傾向が見られるが、条件の良い倒木などには集まることもある。現在のところ森林伐採等の棲息地改変は確認されていないが、棲息地から最短で 300m 附近の山中にバイパスのトンネルが開通しているほか、近年では台風の大型化や直撃数の増加による森林の荒廃も懸念される。

随時見直しの評価理由

Ueshima (1991, 1993) において、ナタマメギセルには種レベルに相当する分化をもつ 4 つの集団が存在することが示されている。しかしこれまでの評価では包括して 1 種として扱われ、分布域や棲息地面積も 4 集団を合わせたものであるため、集団ごとの状況から見れば現在のランクは過小評価である可能性が高い。したがって、より実情に即した評価を行うため、種に相当する各集団をそれぞれ個別の評価対象として提案した。本種は Ueshima (1993) の「Small form (小型)」に該当する。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

富山清升・西邦雄・行田義三, 2016. ナタマメギセル. 鹿児島県環境林務部自然保護課(編)改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編ー鹿児島県レッドデータブック 2016ー, p. 267. 鹿児島県環境林務部自然保護課, 鹿児島.
Ueshima, R., 1991. Systematic studies on *Luchuphaedusa* (*Oophaedusa*) *ophidoon* species complex. Doctoral thesis, University of Tsukuba.
Ueshima, R., 1993. Morphological Divergence and Speciation in the Clausiliid Snails of the *Luchuphaedusa* (*Oophaedusa*) *ophidoon* Species Complex, with Special Reference to the Hybrid-Zone. *Venus*, 52: 259-281.

執筆: 亀田勇一(国立科学博物館)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): CR+EN

イシガイ目イシガイ科

【貝類】

日本固有種

イケチョウガイ

Sinohyriopsis schlegelii (Martens, 1861)

カテゴリー判定基準: A-2

基礎情報

殻は翼卵円形から翼長卵形で平たい。殻頂の両側背縁に翼状突起があり、幼貝では著しく発達するが、成貝になると目立たなくなる。殻長は最大で 25 cmに達する。幼生は楕円形で、腹縁に刺状突起はなく、殻長は 0.23 mmである。琵琶湖では水深 20m までの砂泥～軟泥底に多く生息する。成長がよければ 2 年(殻長 5 cm以上)で性成熟に達し、寿命は最大で約 40 年である。妊卵期は 5～7 月で、放出された幼生はギギやゼゼラなどの底生魚に寄生する。

分布域・生息地・個体数の現況

琵琶湖・淀川水系の固有種。淀川水系では 1990 年以後に確認されていない。琵琶湖と移植された霞ヶ浦では近年生息が確認されていない。また、これらの水系では中国産ヒレイケチョウガイとの交雑種が生息し、岐阜県の揖斐川水系まで分布を広げている。しかし、青森県の姉沼には琵琶湖からの移植個体群が健全な状態で生息している。

随時見直しの評価理由

近年の調査によって、琵琶湖内ではヒレイケチョウガイとの交雑種がかなりの密度で生息し、イケチョウガイは全く見られなくなっていることが明らかになってきたことから、早急な評価が必要と考えられるため、今年度随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

湖沼開発(12) 水質汚濁(31) 捕獲・狩猟(41) 交雑(外来種による)(57-1) その他(71)

参考文献

近藤高貴, 2001. イケチョウガイ, 平成 12 年度希少水生生物保存対策推進事業報告書, pp. 19-26.
松田裕之, 2000. 長寿命無脊椎動物の絶滅リスク評価, 化学物質のリスク評価・リスク管理に関する国際ワークショップ講演要旨, pp. 192-199.
幡野真隆・石崎大介, 2016. イケチョウガイ稚貝の給餌飼育. *Venus*, 74: 99-104.

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): NT

イシガイ目イシガイ科

【貝類】

カラスガイ

Cristaria plicata (Leach, 1814)

カテゴリー判定基準: A-2, B-1,2

基礎情報

殻は翼長卵形で平たい。大型で殻長 20cm を超える。殻頂の両側背縁に翼状突起があり、幼貝では著しく発達するが成貝になると目立たなくなる。後ろの翼状突起は高く、その前縁は滑らかで、その付け根の後背縁には顕著なシワ状の褶曲がある。後側歯はあるが擬主歯はない。繁殖期は晩秋から早春で、幼生はゴクラクハゼ、ウキゴリ、ヨシノボリ類などの鰭や鰓に寄生する。

分布域・生息地・個体数の現況

青森県姉沼および日本海側にある平野部の湖沼や大河川の下流部の砂泥～軟泥底に生息している。

随時見直しの評価理由

これまでレッドリスト 2019 ではカラスガイとして NT の評価がなされていた。分子系統解析の結果、カラスガイは日本海側の個体群だけとなり生息範囲が狭くなったため、今年度の随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

湖沼開発(12) 河川開発(13) 水質汚濁(31) その他(71)

参考文献

Kondo, T., 2008. Monograph of Unionoidea in Japan (Mollusca: Bivalvia). Special Publication of the Malacological Society of Japan, 3: V+1-69.
宮本康・福本一彦・島山恵介・森明寛・前田晃宏・近藤高貴, 2015. 鳥取県における特定希少野生動物カラスガイ *Cristaria plicata* 個体群の現状: 幼生と宿主魚類の関係に着目して. 保全生態学研究, 20: 59-69.
Sano, I., A. Shirai, T. Kondo and J. Miyazaki, 2017. Phylogenetic relationships of Japanese Unionoidea (Mollusca: Bivalvia) based on mitochondrial 16S DNA sequences. Journal of Water Resource and Protection, 9: 493-509.

執筆: 近藤高貴 (大阪教育大学名誉教授)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): NT

新生腹足目ゴマガイ科

【貝類】

ハンミガキゴマガイ

日本固有種

Diplommatina nishii Yamamoto & Uozumi, 1988

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻は殻長約 2.3mm、殻径約 1.3mm、太い紡錘形で縫合はくびれる。螺塔は円錐形。淡い黄褐色～赤褐色で螺塔には粗い成長肋を持つが、次体層と体層はほぼ平滑。殻口はほぼ円形。腔壁は短く、殻径の 1/4 程度。上甌島中部から南部において、落葉の堆積する湿った林床に生息する。

分布域・生息地・個体数の現況

上甌島固有種。2018 年の現地調査では上甌島南部で確認され、それ以前の調査では中部でも確認されている。自然林や二次林の林床に生息し、林縁に多産する場合もあるが、分布はパッチ状である。林床の湿潤な落葉堆積環境を好むため、過剰な乾燥や豪雨が度重なれば生息環境自体が失われる可能性が高い。

随時見直しの評価理由

2018 年 10 月に行った環境省レッドリスト見直しに係る現地調査によって、最新の生息状況や評価を行うためのデータが得られたため、今年度の随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61)

参考文献

行田義三・富山清升・西邦雄, 2016. ハンミガキゴマガイ, 鹿児島県環境林務部自然保護課(編)改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 - 鹿児島県レッドデータブック 2016-, p. 242. 鹿児島県環境林務部自然保護課, 鹿児島。

執筆: 亀田勇一 (国立科学博物館)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):NT

異鱗目キセルガイモドキ科

【貝類】

リュウキュウキセルモドキ

Luchuena luchuana (Pilsbry, 1901)

カテゴリー判定基準: B-1,3

基礎情報

殻はやや太い塔型、殻長約 18~20mm、殻径 6~8mm。殻色は淡黄白色の地に淡桃白色~淡紫桃色の虎斑を散在させる。西表島により大型の近縁の絶滅危惧種ニシキセルモドキが知られている。風通しが良く、かつ小河川や雲霧等で空中湿度の保持された亜熱帯林で生息が認められ、自然林の樹幹に生える特殊な真菌類を摂食し、人工繁殖はおろか数ヶ月単位の飼育も成功した報告事例はない。本種の所属科に属する種にはハチジョウキセルモドキやチャイロキセルモドキ等絶滅に瀕している種が多い。

分布域・生息地・個体数の現況

1990年代まで与那国島、石垣島では局所的に多産した例があり、西表島ではニシキセルガイモドキに比べて個体数は多かった。しかし、2010年代の調査では石垣島、与那国島で減少、西表島でも分布が限定され、生息範囲も局所的である。伊良部島では死殻すら確認できず、絶滅している可能性が高い。

随時見直しの評価理由

本種は沖縄県宮古諸島の伊良部島、八重山諸島の石垣島、西表島、与那国島に記録され、分布範囲が広く、個体数も少なくなかったために準絶滅危惧と評価されてきた。八重山諸島の石垣島では1990年代まで東部石灰岩地や於茂登岳山麓に少なくなかったが、2017年および2019年の調査で著しい減少が認められた。与那国島では2015年の調査で個体数密度の激減が確認された(亀田 2017, 久保ほか 2018)。西表島では主に標高の高い自然林で生息が確認され、分布も散在している。伊良部島では2016~2017年の調査で生体はおろか死殻すら確認できず、絶滅の可能性が示唆されている(久保 2019)ことなどから、今年度の随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 捕獲・狩猟(41) 捕食(在来種による)(52-4) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

亀田 勇一, 2017. リュウキュウキセルモドキ, 沖縄県環境部自然保護課(編)改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物第3版(動物編)ーレッドデータおきなわー, p. 517. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

久保弘文・福田宏・早瀬善正・亀田勇一・小澤宏之・上島励, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告 1. 与那国島, *Molluscan Diversity*, 5: 1-14.

久保弘文, 2019. 陸産貝類, 宮古島市教育委員会(編)みやこの自然 宮古島市史第三巻 自然編第0部(本編)第4章陸域の動物, 宮古島市教育委員会, 宮古島.

執筆:久保弘文(沖縄県海洋深層水研究所)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):NT

異鱗目キセルガイモドキ科

【貝類】

キカイキセルモドキ

Luchuena reticulata (Reeve, 1849)

カテゴリー判定基準: B-1,3

基礎情報

殻長 18~20mm、殻径 9~10mm、太い紡錘形で縫合はほとんどくびれない。殻はやや厚く、薄い黄褐色~桃褐色で、白い火炎彩や縞模様を有する。樹幹や石灰岩壁等に垂下して付着し、夜間や降雨時に行動する。

分布域・生息地・個体数の現況

本種は鹿児島県喜界島、奄美大島、徳之島、沖永良部島の奄美諸島から沖縄県沖縄島中北部の広範囲に分布する固有種である。生息地が里山や海岸林に形成される傾向があり、開発等により森林環境が悪化しやすい。また樹上性に目に付きやすいため、採取圧や捕食圧の影響を受けやすいと考えられる。

随時見直しの評価理由

これまで本種は広範囲に分布し、局所的に多産するため、絶滅リスクは比較的低いと認識されてきた。しかし、2017年の沖縄県レッドデータブックで絶滅危惧I類とされた。沖縄島は本種が生息する最大面積の島嶼で1990年代までは鈴なりになるほど多産していたが、2010年以降、ほぼ全ての既存産地で著しく減少し、絶滅したと考えられる場所も少なくない。北限分布地の喜界島では2009年まで少なからず記録があるが、2016年の調査では死殻しか記録されていない。その他の島嶼においても生息場所が平地の小規模海岸林に限定され、人為的改変を受けやすいことなどから、今年度の随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 海岸開発(14) 洞窟の消失や環境悪化(18) 交通事故(26) 捕獲・狩猟(41) 捕食(在来種による)(52-4) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

亀田 勇一, 2017. キカイキセルモドキ, 沖縄県環境部自然保護課(編)改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物第3版(動物編)ーレッドデータおきなわー, p. 448. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

久保弘文, 2017. 陸産貝類, 名護市史編さん委員会(編)名護市史 本編1 自然と人 第1巻 自然編, 名護市役所, 名護.

久保弘文, 2014. 恩納村の貝類, 恩納村誌編さん委員会(編)恩納村誌 第1巻 自然編, pp. 245-340. 沖縄県恩納村, 恩納.

執筆:久保弘文(沖縄県海洋深層水研究所)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): VU

異鱗目キセルガイ科

【貝類】

アズマギセル

日本固有種

Stereophaedusa azumai (Pilsbry, 1905)

カテゴリー判定基準: B-2,3

基礎情報

殻は殻長約 22~26mm、殻径約 6mm の紡錘形で、厚く堅固。成長脈は細かいが、体層背面でやや粗くなる。地上棲で、落葉下、倒木下、ガレ場の礫間などから見出される。自然林だけでなく二次林の林床にも出現する。

分布域・生息地・個体数の現況

甌島列島固有種。上甌島中部から中甌島、下甌島まで広く分布するが、おおむね生息密度は低い。個体数は少ないものの、自然林だけでなく二次林にも生息する。2018 年の調査においては、上甌島では北東部を除く広い範囲で確認された。下甌島では過去の記録を合わせると分布域は島の大部分にわたるが、2018 年の調査では標高 200m 以上の地点のみで確認された。過去に記録のある、標高の低い地点付近では見出されておらず、さらなる現状確認が必要。

随時見直しの評価理由

2018 年 10 月に行った環境省レッドリスト見直しに係る現地調査によって、最新の生息状況や評価を行うためのデータが得られたため、今年度の随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 遷移進行・植生変化(54) 局所分布(61)

参考文献

行田義三, 1995. 下甌島の貝類相, 鹿児島県立博物館(編)鹿児島県の自然調査事業報告書 II 北薩の自然, pp. 159-172. 鹿児島県立博物館, 鹿児島.
行田義三・西邦雄・富山清升, 2016. アズマギセル, 鹿児島県環境林務部自然保護課(編)改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 -鹿児島県レッドデータブック 2016-, p. 266. 鹿児島県環境林務部自然保護課, 鹿児島.

執筆: 亀田勇一(国立科学博物館)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): CR+EN

異鱗目キセルガイ科

【貝類】

トクネニヤダマシギセル

日本固有種

Stereophaedusa caudata (Minato, 1981)

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻は殻長 17mm 前後の紡錘形。褐色で殻表には細かい成長脈をもつ。殻口縁は広く反曲し、上板と下板は明瞭。下軸板は唇縁近くまで達する。主襞は短く、上・下腔襞とその間に小さな腔襞をもつ。樹上棲で、天城岳や井之川岳において、比較的標高の高い湿潤な自然林の樹幹に付着する。卵胎生。

分布域・生息地・個体数の現況

徳之島固有種。井之川岳や天城岳など比較的標高が高く、まとまった森林面積を有する山地に分布する。湿潤な自然林では 1 本の木に複数個体が付着している様子が普通に観察される。生息地においては、現在は比較的まとまった個体数が確認できているが、他の樹上棲種では生息地の人為的改変がなくとも著しく減少している例があるため、本種の動向にも注意する必要があると考えられる。

随時見直しの評価理由

2018 年 7 月に実施した環境省の現地調査において、分布や生息状況を確認することができたため、最新の情報に基づいて今年度の随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 捕獲・狩猟(41) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

富山清升・重田弘雄・西邦雄, 2016. トクネニヤダマシギセル, 鹿児島県環境林務部自然保護課(編)改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 -鹿児島県レッドデータブック 2016-, p. 275. 鹿児島県環境林務部自然保護課, 鹿児島.

執筆: 亀田勇一(国立科学博物館)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

異種目キセルガイ科

【貝類】

ナタメギセル (北部大型)

日本固有種

Stereophaedusa sp. (NL)

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

殻は殻長約 11.4–15.8 mm、ずんぐりとした紡錘形で殻頂は丸い。殻口縁はよく肥厚し、内唇には強い鋸歯状の刻みがある。上板と下板は明瞭で、下軸板は唇縁に達する。地上棲で、林床の落葉や倒木下に棲息し、比較的乾燥した林にも出現する。卵生で、卵は殻長の 1/3 ほどの径をもつ。

分布域・生息地・個体数の現況

下甌島固有。旧鹿島村中部から旧下甌村北部にかけて分布し、自然林やそれに隣接する二次林的な環境に棲息する。林床に一樣な密度で棲息する傾向が見られるが、条件の良い倒木などには集まることもある。現在のところ森林伐採等の棲息地改変は少ないが、下甌島-中甌島の架橋が開通すれば、棲息域の東部を通る県道にも交通量の変化が予想され、道路周辺の環境変化や個体群の動向には注意する必要がある。また、近年では台風の大規模化や直撃数の増加による森林の荒廃も懸念される。

随時見直しの評価理由

Ueshima (1991, 1993) において、ナタメギセルには種レベルに相当する分化をもつ 4 つの集団が存在することが示されている。しかしこれまでの評価では包括して 1 種として扱われ、分布域や棲息地面積も 4 集団を合わせたものであるため、集団ごとの状況から見れば現在のランクは過小評価である可能性が高い。したがって、より実情に即した評価を行うため、種に相当する各集団をそれぞれ個別の評価対象として提案した。本種は Ueshima (1993) の「Northern Large form (北部大型)」に該当する。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

富山清升・西邦雄・行田義三, 2016. ナタメギセル, 鹿児島県環境林務部自然保護課(編) 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物動物編—鹿児島県レッドデータブック 2016—, p. 267. 鹿児島県環境林務部自然保護課, 鹿児島。

Ueshima, R., 1991. Systematic studies on *Luchuphaedusa* (*Oophaedusa*) *ophidoon* species complex. Doctoral thesis, University of Tsukuba.

Ueshima, R., 1993. Morphological Divergence and Speciation in the Clausiliid Snails of the *Luchuphaedusa* (*Oophaedusa*) *ophidoon* Species Complex, with Special Reference to the Hybrid-Zone. *Venus*, 52: 259-281.

執筆: 亀田勇一(国立科学博物館)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

異種目キセルガイ科

【貝類】

ナタメギセル (南部大型)

日本固有種

Stereophaedusa sp. (SL)

カテゴリー判定基準: B-2,3

基礎情報

殻は殻長約 10.6–15.8 mm、ずんぐりとした紡錘形で殻頂は丸い。殻口縁はよく肥厚し、内唇には強い鋸歯状の刻みがある。上板と下板は明瞭で、下軸板は唇縁に達する。地上棲で、林床の落葉や倒木下に棲息するが、湿潤な天然林よりもやや乾燥した林を好む可能性がある。卵生で、卵は殻長の 1/3 ほどの径をもつ。

分布域・生息地・個体数の現況

下甌島固有。北部を除く旧下甌村一帯に広く分布し、自然林やそれに隣接する二次林的な環境に棲息する。林床に一樣な密度で棲息する傾向が見られるが、条件の良い倒木などには集まることもある。現在のところ森林伐採等の棲息地改変は少ないが、既に棲息域東部では県道のバイパス化やトンネル工事が行われているほか、下甌島-中甌島の架橋が開通すれば県道の交通量にも変化が予想され、道路周辺の環境変化や個体群の動向には注意する必要がある。また、近年では台風の大規模化や直撃数の増加による森林の荒廃も懸念される。

随時見直しの評価理由

Ueshima (1991, 1993) において、ナタメギセルには種レベルに相当する分化をもつ 4 つの集団が存在することが示されている。しかしこれまでの評価では包括して 1 種として扱われ、分布域や棲息地面積も 4 集団を合わせたものであるため、集団ごとの状況から見れば現在のランクは過小評価である可能性が高い。したがって、より実情に即した評価を行うため、種に相当する各集団をそれぞれ個別の評価対象として提案した。本種は Ueshima (1993) の「Southern Large form (南部大型)」に該当する。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

富山清升・西邦雄・行田義三, 2016. ナタメギセル, 鹿児島県環境林務部自然保護課(編) 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物動物編—鹿児島県レッドデータブック 2016—, p. 267. 鹿児島県環境林務部自然保護課, 鹿児島。

Ueshima, R., 1991. Systematic studies on *Luchuphaedusa* (*Oophaedusa*) *ophidoon* species complex. Doctoral thesis, University of Tsukuba.

Ueshima, R., 1993. Morphological Divergence and Speciation in the Clausiliid Snails of the *Luchuphaedusa* (*Oophaedusa*) *ophidoon* Species Complex, with Special Reference to the Hybrid-Zone. *Venus*, 52: 259-281.

執筆: 亀田勇一(国立科学博物館)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): CR+EN

異種目ナンパンマイマイ科

【貝類】

日本固有種

トクノシマケハダシワクチマイマイ

Moellendorffia tokunoensis Pilsbry & Hirase, 1905

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

殻は殻径 23mm 内外、殻長は 12mm 内外の円盤型。螺塔は高まらず、殻頂附近は凹む。周縁は丸く、臍孔は広く開く。紫褐色～赤褐色で、殻表には胎殻を除く全面に粗い殻皮毛を有する。軟体は黒い。

分布域・生息地・個体数の現況

徳之島と沖縄島から記録があるが、沖縄島では過去に僅かな死殻が記録されているのみで、絶滅したと考えられている。2018年の徳之島調査では、30 地点中 10 地点以上で生貝が確認された。生息地は主に自然林で、山頂附近から山麓の林縁部まで広く出現する。地上棲で湿潤な環境を好み、山麓附近では倒木や落葉溜まりなど湿った場所からまとまって見出されることが多い。天城岳・井之川岳・犬田布岳など主要な山地には広く分布すると考えられるが、山麓附近や低標高地の林では開発や乾燥化により生息できる環境が減少している。

随時見直しの評価理由

2018 年 7 月に実施した環境省の現地調査において、従来考えられていたよりも生息範囲が広く、個体数も少なくないことが分かったため、最新の情報に基づいて今年度の随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 捕獲・狩猟(41) 局所分布(61)

参考文献

黒住耐二, 2017. トクノシマケハダシワクチマイマイ, 沖縄県環境部自然保護課 (編) 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物第 3 版 (動物編) - レッドデータおきなわ -, pp. 424-425. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
西浩孝・重田弘雄・行田義三・富山清升, 2016. トクノシマケハダシワクチマイマイ, 鹿児島県環境林務部自然保護課(編) 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物動物編-鹿児島県レッドデータブック 2016-, p. 304. 鹿児島県環境林務部自然保護課, 鹿児島.

執筆: 亀田勇一 (国立科学博物館)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): CR+EN

異種目ナンパンマイマイ科

【貝類】

日本固有種

トクノシマビロウドマイマイ

Nipponochloritis obscura (Pilsbry & Hirase, 1904)

カテゴリー判定基準: B-1.2

基礎情報

殻は殻径 12~15mm 程度、螺塔は低く、周縁は丸く、臍孔は開く。殻口縁は反曲し肥厚する。褐色～黄褐色で、殻表には短い殻皮毛が密生する。地上棲であり、乾燥時には主に倒木下や枯枝・落葉溜まりなど湿った環境から見出されるが、雨後など湿度の高いときには表層で活動する。

分布域・生息地・個体数の現況

徳之島固有種。2018 年の調査では、30 地点中 4 地点で生貝が確認された。生息地はいずれも低地のやや乾燥した林や林縁部であり、従来考えられていたような自然度の高い森林よりも、人里に近い環境を主な生息場所としている可能性を考慮する必要がある。個々の地点での生息範囲は狭く、密度も低い(各地点 1~数個体)ため、低地の小規模な林などに残存している個体群が見過ごされたまま工事等で消滅している可能性がある。

随時見直しの評価理由

これまで日本最稀産陸貝のひとつとされ、生体の確認記録がほとんどないまま CR+EN として扱われていた。2018 年 7 月に実施した環境省の現地調査において生貝が複数確認され、その生息環境についても従来の認識を改める必要があることが分かったため、最新の情報に基づいて、今年度の随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 局所分布(61)

参考文献

湊宏, 1981. 日本産陸棲貝類の生殖器の研究 XIX: ホシヤマビロウドマイマイとトクノシマビロウドマイマイ. *Venus*, 40: 95-97.
重田弘雄・西浩孝・行田義三・西邦雄・富山清升, 2016. トクノシマビロウドマイマイ, 鹿児島県環境林務部自然保護課 (編) 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物動物編-鹿児島県レッドデータブック 2016-, p. 302. 鹿児島県環境林務部自然保護課, 鹿児島.

執筆: 亀田勇一 (国立科学博物館)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):なし(種分離による評価)

イシガイ目イシガイ科

【貝類】

キュウシュウササノハガイ

日本固有種

Lanceolaria kihirai Kondo & Hattori, 2019

カテゴリー判定基準:A-2

基礎情報

殻は極端に細長く大型で通常は殻長 15 cm を超えない。前縁は丸く、後端は尖る。殻表には弱い皺状の彫刻が見られる。稜角は丸く、後端に近づくにつれて不明瞭となる。真珠層は淡いピンク色をしている。幼生は垂三角形で、刺状突起がある。幼生の色は多彩で、淡黄色や橙色である。

分布域・生息地・個体数の現況

九州北部(長崎県、佐賀県、熊本県、福岡県、大分県)に分布が限定されている固有種である。全ての生息地で個体群密度は低い。

随時見直しの評価理由

レッドリスト 2019 まではトンガリササノハガイとして NT の評価がなされていた。最近の研究により、日本に棲息するトンガリササノハガイは、九州と本州・四国の集団間に大きな遺伝的相違があることが判明し(白井 2009)、またこの2集団はトンガリササノハガイ *Lanceolaria grayii* のタイプ産地である中国の集団とは遺伝的に大きく異なることが示された(瀬尾 2019)ため、2019 年に九州の集団はキュウシュウササノハガイ *Lanceolaria kihirai* Kondo & Hattori, 2019 として新種記載された。キュウシュウササノハガイの分布域は九州北部に限定され、また生息箇所が少なく生息密度も低いので早急に RL での評価が必要と考えられ、今年度随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

河川開発(13) 圃場整備(15-2) 水質汚濁(31)

参考文献

Kondo, T. and M. Hattori, 2019. A new species of the genus *Lanceolaria* (Bivalvia: Unionidae) from Japan. *Venus*, 78: 27-31.

白井亮久, 2009. 日本産淡水生二枚貝(イシガイ目)の分子系統学的研究, 千葉大学学位申請論文.

瀬尾友樹, 2019. 日本産イシガイ科貝類の保全に向けた分類および遺伝的多様性に関する研究, 近畿大学大学院農学研究科学学位論文.

執筆:近藤高貴(大阪教育大学名誉教授)

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):CR+EN

イシガイ目イシガイ科

【貝類】

オグラヌマガイ

日本固有種

Sinanodonta tumens (Haas, 1910)

カテゴリー判定基準:C1

基礎情報

殻は卵円形で、殻頂から同心円状に太いしわが発達する。殻頂の両側背縁に翼状突起があり、幼貝では著しく発達するが成貝になると目立たなくなる。殻長は最大で 20 cm に達する。幼生は垂三角形で腹縁に刺状突起があり、殻長は 0.26 mm である。琵琶湖・淀川水系の固有種。少し流れがあるか、伏流水がある場所で、水深 1~5m の軟泥底に生息する。2 年(殻長 5 cm)で性成熟し、寿命は約 10 年である。妊卵期は 1~8 月であるが、幼生の大部分は 4 月下旬~5 月中旬にかけて放出され、トウヨシノボリなどの鰓や鱗に寄生する。

分布域・生息地・個体数の現況

琵琶湖では稀にしか採集されないが、湖東に高密度で生息する溜池がある。淀川のワンドでも稀に採集される。

随時見直しの評価理由

近年の調査によって琵琶湖・淀川水系における生息状況が明らかになってきたので、今年度随時見直しにおいて評価した。また、文献調査によって古い記載が見つかったので、国際動物命名規約に従って学名を変更した。

存続を脅かす要因

湖沼開発(12) 河川開発(13) 水質汚濁(31)

参考文献

Haas, F., 1910. New Unionidae from East Asia. *Annals and Magazine of Natural History*, 8: 496-499.

紀平肇, 1998. オグラヌマガイ, 水産庁(編) 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック, pp. 40-41. 日本水産資源保護協会, 東京.

金尾滋史, 2014. 滋賀県東部のため池で発見されたオグラヌマガイとその経緯. *ちりぼたん*, 44: 22-23.

執筆:近藤高貴(大阪教育大学名誉教授)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):なし

異種目ノコウラナメクジ科

【貝類】

クロツノナメクジ

日本固有種

Deroceras sp.

カテゴリー判定基準: B-1,2

基礎情報

未記載種。別名スハダナメクジ。伸長時の体長約 50 mm、体幅約 8 mm、ほっそりとしたナメクジ状で活潑に匍匐し、休息時は太短く縮こまる。体表は濃橙色ないし淡い藁色で、背面は顕著な網目状に刻まれる。頭触角及び第二触角は黒色。体の前方は外套盾で覆われ、その右側後方に呼吸孔が開口し、背面後半に小判形で扁平な白色の殻が内在する。後端は尖る。蹠面は一对の溝が前後縦方向に走る。生殖器は多くの場合陰茎腺を欠く。

分布域・生息地・個体数の現況

兵庫県及び中国地方 4 県と四国 4 県から知られ、近畿地方東部以東や九州ではまだ明確な報告がない。山間部広葉樹林の湿った林床や転石間などに産する。山陰地方では比較的標高の低い地域にも見られるのに対し、山陽地方の瀬戸内海沿岸域平野部では稀産。スギやヒノキが植林された場所は棲息に適さないとみられる。分布域が限られる上に、森林伐採や植林、及び温暖化に起因する過剰乾燥によって棲息可能な範囲が狭められている可能性が高い。

随時見直しの評価理由

西日本数県のレッドリストに登録され、一部では既に存在を知られているものの未記載種で、従来は分布範囲や棲息の現状の情報に乏しかったため環境省レッドリスト未登録であった。湊 (2018) はこれまでの情報を網羅した包括的報告を発表し、形態・所属・分布・棲息状況の概要が明らかとなった。今のところ兵庫・岡山・鳥取・島根・山口・香川・徳島・高知・愛媛各県から確認されている。比較的多湿な森林環境に特有で低地には少ない。近年の森林縮小や温暖化に伴う過剰乾燥などにより、本来の分布域の狭さ・個体群数の少なさも相俟って危機的状況に傾きつつあり、早急に稀少性評価が必要と考えられるため今年度の随時見直し対象種とした。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) ゴルフ場(21) 土地造成(23) 道路建設(24) ダム建設(25) 農薬汚染(32) 遷移進行・植生変化(54)

参考文献

矢野重文, 2007. 香川県の陸産貝類, 香川県高等学校生物・地学部会(編) 香川の生物, pp. 163-178. 香川県高等学校生物・地学部会, 高松.
 増田修, 2014. スハダナメクジ, 兵庫県自然環境課(編) 兵庫県の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック 貝類・その他無脊椎動物, p. 60. ひょうご環境創造協会, 神戸.
 湊, 2018. 西日本におけるクロツノナメクジ *Deroceras* sp. (真有肺目: 柄眼亜目: ノコウラナメクジ科) の新分布記録と生殖器形態, ちりぼたん, 48: 37-43.
 執筆者: 福田 宏(岡山大学大学院)・早瀬善正(株式会社東海アクアノーツ)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):なし

異種目ナンバンマイマイ科

【貝類】

シズオカマイマイ

日本固有種

Satsuma sp.

カテゴリー判定基準: B-1,2, D

基礎情報

殻は、殻長 15~17 mm、殻径 17~18 mm 程度、低円錐形で淡黄褐色~茶褐色、周縁にはきわめて淡く細い色帯を有し、殻表は平滑である。臍孔は狭いが深く明瞭に開口する。生殖器官の鞭状器は、長さが 10 mm 程度で、先端部にかけて細い形状である。静岡県中部の限られた低山地のみに生息する。主に沢沿いなどの湿潤な森林環境に少数個体が確認される。生活史などは解明されていない。

分布域・生息地・個体数の現況

静岡県中部の広域に分布するものの、生息範囲はごく狭く、生息地周辺の環境には全く確認されない。環境選択性の強さに起因すると考えられるが、本種の実際の生息地面積は極端に狭い。例えば、静岡市清水区の竜爪山では、中腹に確認されるが、山麓の周辺地域には全く生息しない。竜爪山では、近年の豪雨に伴う谷部斜面の崩落箇所もあるなど、自然災害が原因の本種の生息環境悪化傾向もある。2018 年に調査した静岡市大鈿では、以前に比べて死殻の確認個体数が著しく減少していた。生貝はどの地域でも、雨天時に 1~2 個体程度のごく少数個体が稀に確認される程度である。焼津~用宗~静岡市にかけての、人の生活環境近くでの低山地での生息例も多いため、宅地や土地開発による生息地減少も懸念される。

随時見直しの評価理由

静岡県中部の限られた地域のみに生息する未記載種である。早瀬(1999)では、シメクチマイマイの地方型とされていたが、Kameda & Fukuda (2015) により、シメクチマイマイは兵庫県以西の本州と四国、九州の一部のみに分布する種であることが結論付けられ、シメクチマイマイとは別種であることが明らかとなった。その後、早瀬ほか(2016)によりシズオカマイマイの和名のみが提唱された。近年までシメクチマイマイの一形態型と見なされていたために、これまで本種の評価検討が行われていなかったため、今年度の随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) 自然災害(55)

参考文献

早瀬善正, 1999. 静岡県中部に生息するシメクチマイマイ. かきつばた, 25: 21-22.

早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・矢橋真・西浩孝・川瀬基弘・石井健一郎・岩田明久・仲田彰男・藤原隆則・永尾和彦, 2016. 三岳山の陸産貝類相. かきつばた, 41: 1-16.

Kameda, Y. and H. Fukuda, 2015. Redefinition of *Satsuma ferruginea* (Pilsbry, 1900) (Camaenidae), with description of a new cryptic species endemic to the coasts and islands of the central Seto Inland Sea, western Japan. *Venus*, 73: 15-40.

執筆: 早瀬善正 (株式会社東海アクアノーツ)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし

イシガイ目イシガイ科

【貝類】

メンカラスガイ

日本固有種

Cristaria clessini (Kobelt, 1879)

カテゴリー判定基準: A-2, B-1, 2

基礎情報

殻は翼長卵形で平たい。大型で殻長 20cm を超える。琵琶湖産の個体は他産地のものと比べると殻高がやや高く、膨らみが強い。殻頂の両側背縁に翼状突起があり、幼貝では著しく発達するが成貝になると目立たなくなる。後ろの翼状突起は高く、その前縁は滑らかで、その付け根の後背縁には明瞭なシワ状の褶曲がある。後側歯はあるが擬主歯はない。繁殖期は晩秋から早春で、幼生はジュズカケハゼやヨシノボリ類などの鰭や鰓に寄生する。

分布域・生息地・個体数の現況

本州の太平洋側および瀬戸内地域の平野部にある湖沼や大河川の下部部の砂泥～軟泥底に生息している。

随時見直しの評価理由

これまでレッドリスト 2019 では、カラスガイとして NT の評価がなされていたが、分子系統解析の結果、太平洋側の個体群はカラスガイとは別種となったため今年度の随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

湖沼開発(12) 河川開発(13) 水質汚濁(31) 交雑 (外来種による) (57-1) その他(71)

参考文献

増田修, 1998. カラスガイ, 水産庁(編) 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック, pp. 38-39. 日本水産資源保護協会, 東京.

Kondo, T., 2008. Monograph of Unionoida in Japan (Mollusca: Bivalvia). Special Publication of the Malacological Society of Japan, 3: V+1-69.

Sano, I., A. Shirai, T. Kondo and J. Miyazaki, 2017. Phylogenetic relationships of Japanese Unionoida (Mollusca: Bivalvia) based on mitochondrial 16S DNA sequences. *Journal of Water Resource and Protection*, 9: 493-509.

執筆: 近藤高貴 (大阪教育大学名誉教授)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): NT (種分離による評価)

イシガイ目イシガイ科

【貝類】

ササノハガイ

日本固有種

Lanceolaria oxyrhyncha (Martens, 1861)

カテゴリー判定基準: A-2

基礎情報

殻は極端に細長く大型で、通常は殻長 15 cm を超えない。前縁は丸く後端は尖る。殻表には弱い皺状の彫刻が見られる。稜角は盛り上がり、殻頂から後端まで明瞭である。真珠層は白色をしている。幼生は垂三角形で、刺状突起がある。幼生の色は多彩で、淡黄色、橙色、桃色や赤色である。繁殖期は春から夏にかけてで、幼生はオイカワやヨシノボリ類の鰓に寄生する。

分布域・生息地・個体数の現況

愛知県以西の本州と四国に分布する固有種である。どの生息地も個体群密度は低く、木曾川や淀川ではヌートリアによる食害が顕著である。

随時見直しの評価理由

元来、琵琶湖淀川水系の固有種としてササノハガイ *Lanceolaria oxyrhyncha* が知られていたが、のちにトンガリササノハガイ *Lanceolaria grayii* のシノニムとして扱われるようになったため、レッドリスト 2019 まではトンガリササノハガイとして NT の評価がなされていた。最近の分子系統解析の結果、日本産トンガリササノハガイはタイプ産地である中国の集団とは遺伝的に大きく異なることが判明した(瀬尾 2019)。日本産トンガリササノハガイは九州と本州・四国の2集団に分かれる(白井 2009)ため、2019年に九州集団はキュウシュウササノハガイとして新種記載され、本州・四国集団(琵琶湖淀川水系集団を含む)はササノハガイとして扱われることになり *Lanceolaria oxyrhyncha* の学名が復活した。近年、主要な生息地でヌートリアの捕食が顕著に認められ、早急に再評価が必要と考えられたため、今年度の随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

湖沼開発(12) 河川開発(13) 圃場整備(15-2) 水質汚濁(31) 捕食 (外来種による) (52-3)

参考文献

Kondo, T. and M. Hattori, 2019. A new species of the genus *Lanceolaria* (Bivalvia: Unionidae) from Japan. *Venus*, 78: 27-31.

白井亮久, 2009. 日本産淡水二枚貝(イシガイ目)の分子系統学的研究, 千葉大学学位申請論文.

瀬尾友樹, 2019. 日本産イシガイ科貝類の保全に向けた分類および遺伝的多様性に関する研究, 近畿大学大学院農学研究科学学位論文.

久米学・小野田幸生・根岸淳二郎・佐川志朗・永山滋也・萱場祐一, 2012. 木曾川氾濫原水域における特定外来生物ヌートリア (*Myocaster coypus*) によるイシガイ科二枚貝類の食害. *陸水生物学報*, 27: 41-47.

石田惣・木邑聡美・唐澤恒夫・岡崎一成・星野利浩・長安菜穂子, 2015. 淀川のヌートリアによるイシガイ科貝類の捕食事例, および死殻から推定されるその特徴. 大阪

NT

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): VU

異鱗目キセルガイ科

【貝類】

コシキジマギセル

日本固有種

Stereophaedusa koshikijimana (Pilsbry, 1905)

カテゴリー判定基準: b)

基礎情報

殻は殻長 11~14mm 程度、殻径約 3mm の紡錘形で厚質。淡黄褐色で光沢があり、微細な成長脈をもつ。殻口は体層から少し突き出る。上板は明瞭であるが下板は奥に位置し、殻口から視認しづらい。下軸板は唇縁に出ない。北東部・北西部を除く上甌島と、中甌島、下甌島の広い範囲に棲息する。落葉や倒木の下、礫間などから見出され、地上棲傾向が強いと考えられるが、樹幹の低い位置まで走上する個体も少なくない。

分布域・生息地・個体数の現況

甌島列島固有種。上甌島中部から中甌島、下甌島まで広く分布し、個体数の多寡はあるものの、山頂から海岸近くまで、自然林・二次林を問わず様々な場所で確認される。2018 年の調査においても、1 地点で複数個体が見出される場合がほとんどで、林縁から林内まで広く棲息していると考えられる。

随時見直しの評価理由

2018 年 10 月に行った環境省レッドリスト見直しに係る現地調査によって、最新の生息状況や評価を行うためのデータが得られたため、今年度の随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 局所分布(61)

参考文献

行田義三, 1995. 下甌島の貝類相, 鹿児島県立博物館(編) 鹿児島県の自然調査事業報告書 II 北薩の自然, pp. 159-172. 鹿児島県立博物館, 鹿児島.
行田義三・西邦雄・富山清升, 2016. コシキジマギセル, 鹿児島県環境林務部自然保護課(編) 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 - 鹿児島県レッドデータブック 2016-, p. 264. 鹿児島県環境林務部自然保護課, 鹿児島.

執筆者: 亀田勇一(国立科学博物館)

DD

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし(種分離による評価)

異鱗目キセルガイ科

【貝類】

ナタマメギセル (偽南部大型)

日本固有種

Stereophaedusa sp. (pSL)

カテゴリー判定基準: b) c)

基礎情報

殻はずんぐりとした紡錘形で殻頂は丸い。殻口縁はよく肥厚し、内唇には強い鋸歯状の刻みがある。上板と下板は明瞭で、下軸板は唇縁に達する。形態では南部大型と区別ができず、アロザイムやミトコンドリア DNA などの遺伝的解析によってのみ識別できるとされる。

分布域・生息地・個体数の現況

下甌島固有。旧下甌村北部の 1 地点のみで確認されている。棲息地点は南部大型の分布域内に位置するが、棲息地の周囲数十 m にはナタマメギセル類が一切棲息しておらず、完全に孤立した集団として存在している(Ueshima 1991)。以降の文献では本型の棲息状況に言及した文献はなく、現状は不明。

随時見直しの評価理由

Ueshima (1991, 1993) において、ナタマメギセルには種レベルに相当する分化をもつ 4 つの集団が存在することが示されている。しかしこれまでの評価では包括して 1 種として扱われ、分布域や棲息地面積も 4 集団を合わせたものであるため、集団ごとの状況から見れば現在のランクは過小評価である可能性が高い。したがって、より実情に即した評価を行うため、種に相当する各集団をそれぞれ個別の評価対象として提案した。本種は Ueshima (1991) の「pseudo-Southern Large form (偽南部大型)」に該当する。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) 捕獲・狩猟(41) 自然災害(55) 局所分布(61)

参考文献

富山清升・西邦雄・行田義三, 2016. ナタマメギセル, 鹿児島県環境林務部自然保護課(編) 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物動物編 - 鹿児島県レッドデータブック 2016-, p. 267. 鹿児島県環境林務部自然保護課, 鹿児島.
Ueshima, R., 1991. Systematic studies on *Luchuphaedusa* (*Ophaedusa*) *ophidoon* species complex. Doctoral thesis, University of Tsukuba.

執筆者: 亀田勇一(国立科学博物館)

削除

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): NT

異名目ナンバンマイマイ科

【貝類】

ダイトウジママイマイ

日本固有亜種

Satsuma mercatoria daitojimaensis (Y. Azuma & M. Azuma, 1994)

削除理由

南大東島固有亜種として記載されたが、南大東島在来ではなく、沖縄島などに分布する *Satsuma miyakoensis* M. Azuma & Y. Azuma, 1987 ミヤコマイマイの移入個体群であることが近年示された (亀田 2017)。この結果に基づいて今回の随時見直しでは国内外来種と判断し、レッドリストから削除した。

参考文献

亀田 勇一, 2017. シュリマイマイ類 (腹足綱: ナンバンマイマイ科) の分布と国内移入状況. *Molluscan Diversity*, 5: 93-112.

執筆: 亀田 勇一 (国立科学博物館)

削除

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): DD

異名目ヒラマキガイ科

【貝類】

スジイリカワコザラ

Ferrissia japonica Habe & Burch in Burch, 1965

削除理由

第4次レッドリストまでずっと情報不足 (DD) として掲載されてきたが、Saito et al. (2018) によるカワコザラ種群の再検討の結果、スジイリカワコザラ (およびコビトノボウシザラ) は *Ferrissia californica* (Rowell 1863) メリケンコザラ (和名初出は齊藤 2017) と同種であり、北米からの移入種であると結論づけられた。この結果に基づき今回の随時見直しにおいて、スジイリカワコザラをレッドリストから削除する。近年の文献 (増田・内山 2004 など) で「カワコザラ」として図示された種は概ね本種である。日本在来のカワコザラは本種とは別に存在し、こちらは絶滅が危惧される稀少種である。

参考文献

増田修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑 ②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜. 240 pp.

齊藤匠, 2017. カワコザラ, 沖縄県環境部自然保護課(編) 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物第3版 (動物編) - レッドデータおきなわ -, p. 447. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

Saito, T., V.T. Do, L. Prozorova, T. Hirano, H. Fukuda and S. Chiba, 2018. Endangered freshwater limpets in Japan are actually alien invasive species. *Conservation Genetics*, 19: 947-958.

執筆: 福田 宏 (岡山大学大学院)・齊藤 匠 (東邦大学)

【その他無脊椎動物】

■補遺資料掲載種一覧

和名		学名		RL カテゴリ	
RL2019(旧)	RL2020	RL2019(旧)	RL2020	2019	2020
トキウモウダニ	トキウモウダニ	<i>Compressalgae nipponiae</i>	<i>Compressalgae nipponiae</i>	DD	EX
—	ヤマネクガビル	—	<i>Orobrella yamaneae</i>	—	DD

EX

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): DD

節足動物門 蛛形綱 (クモ形綱・クモ綱) ダニ目 トキウモウダニ科

【その他無脊椎動物】

トキウモウダニ

Compressalges nipponiae (Dubinin, 1950)

カテゴリー判定基準: ②

基礎情報

大きさはオスで体長 0.38 mm、体幅 0.20 mm、メスで体長 0.45 mm、体幅 0.25 mm。扁平で、肩部が幅広く後方に向かって尻すぼみとなる。後端に 2 対の長毛がある。体色は褐色(ビール瓶の色)。オスは後端は二又に分岐して独特な形になる。腹面から見ると、肛吸盤や生殖器の部分が落ち込んでいるのが特徴。

日本、中国、ロシア(ウスリー川流域)に広く分布していたが、日本ではトキの野生絶滅とともに野生絶滅した。

宿主特異性が強い種で、鳥類の中でトキだけに寄生する。トキの体の部分では、風切羽の羽軸に沿ってしがみついている。トキを吸血することではなく、羽毛の屑などを食している。一生をトキの体の上で生活し、離れることはないと考えられているが、詳しい生態は判明していない。

分布域・生息地・個体数の現況

かつてトキがほぼ日本全土に生息していた頃には、本種の分布も全国的であったと思われるが、トキの分布域が縮小し天然記念物に指定された昭和 27 年前後には新潟県佐渡や石川県輪島などに生息地が限定され、それともなまってトキウモウダニの分布域も縮小したと推定される。

随時見直しの評価理由

トキの野生絶滅に伴い本種も野生絶滅(EW)になったと判断されたが、2019 年 1 月のトキのカテゴリー見直しに伴い本種についてもカテゴリーを見直す必要が生じ、調査がごく限られていたことから情報不足(DD)と判断された。

しかしながら、その後詳細な調査を行ったところ、飼育下のトキやそのケージ、あるいは、放鳥され野外で営巣し、そこから巣立った子孫からも本種は確認されなかったため、絶滅(EX)とするのが適当である。

絶滅に至った要因

その他(71)

参考文献

Waki, T. and S. Shimano, 2020. A report of infection in the crested ibis *Nipponia nippon* with feather mites in current Japan. *Journal of the Acarological Society of Japan*, in press.

執筆者: 島野智之(法政大学自然科学センター)

DD

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし

環形動物門 蛭綱 (ヒル綱) ヒル目 クガビル科

【その他無脊椎動物】

ヤマネクガビル

Orobdella yamaneae Nakano, 2016

日本固有種

カテゴリー判定基準: b) c)

基礎情報

ロシア沿海州から韓国、日本列島、台湾に生息するクガビル類の一種で、淡路島の南部に分布する。他のクガビル類と同様に、湿潤な林床、特に山間の小河川周辺に生息し、陸棲貧毛類(ミズ類)を捕食する。成熟個体の体長は 10 cm を超え、7 月初旬には繁殖期を迎え、性成熟し環帯を有する個体が見られる。2016 年に新たに記載された種で、四国に分布する種と近縁であると推定されている。

分布域・生息地・個体数の現況

淡路島南部に位置する諭鶴羽山地の中でも、現在確認されている生息地は諭鶴羽山のみである。クガビル類が選好する湿潤な生息環境に限られているため、諭鶴羽山においても限られた地点のみで見られ、その分布は非常に局所的であるが、繁殖期であれば、ある程度の密度で生息していることを確認できる。淡路島北部、あるいは隣接する四国東部や紀伊半島西部において、本種の生息は確認されていない。

随時見直しの評価理由

2016 年に新種記載された巨食性ヒル類の一種。生息範囲が局限しており、なおかつその生息範囲も林道整備による開発が行われたために絶滅が危惧されることから、早急にレッドリストでの評価が必要であると考えられた。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 土地造成(23) 道路建設(24) 局所分布(61)

参考文献

Nakano, T., 2016. Four new species of the genus *Orobdella* from Shikoku and Awajishima island, Japan (Hirudinida, Arhynchobdellida, Orobdellidae). *Zoosystematics and Evolution*, 92: 79-102.

中野隆文, 2017. クガビル科(ヒル下綱: 吻無蛭目: イシビル形亜目) の分類と種同定のための簡易検索. *Edaphologia*, 100: 19-29.

執筆者: 中野隆文(京都大学)

【維管束植物】

■補遺資料掲載種一覧

和名		学名		RL カテゴリ	
RL2019(旧)	RL2020	RL2019(旧)	RL2020	2019	2020
—	フクエジマカンアオイ	—	<i>Asarum mitoanum</i>	—	CR
—	アマミチャルメルソウ	—	<i>Mitella amamiana</i>	—	CR
—	ムシャシダ	—	<i>Diplazium megaphyllum</i>	—	CR
シムライノデ	シムライノデ	<i>Polystichum shimurae</i>	<i>Polystichum shimurae</i>	EN	CR
—	アソサイシン	—	<i>Asarum misandrum</i>	—	EN

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):なし

被子植物ウマノスズクサ科

【維管束植物】

フクエジマカンアオイ

Asarum mitoanum

カテゴリー判定基準:D

基礎情報

花の外観はサンヨウアオイ類に似るが、萼筒はやや台形状で、子房の位置は半下位で、また内外 2 輪に配置する雄蕊のうちの外側の 6 個だけが完全に消失している。また、葉の表面は葉脈に沿って凹み、花柱の形態と柱頭の位置でも特異性が認められる。

分布域・生息地・個体数の現況

現地調査を行った結果、成熟個体数が 50 個体未満であることが確認された。記載当時の状況に比べて、生育地面積・個体数ともに激減していた。

随時見直しの評価理由

本種は五島列島福江島のみ分布する種だが、1996 年に新種記載されて以降、これまで生育の実態が詳細には調べられていなかったが、近年の現地調査により残存個体数が非常に少ないことが明らかとなった。本種は過去に山採り個体が流通したこともあり、危機的状況にあると言え、早急にレッドリストにおける評価が必要と考えられた。

存続を脅かす要因 園芸採取(41) 産地局限(61)

参考文献

Sugawara, T., 1996. A New Species of *Asarum* (Aristolochiaceae) from Goto Islands, Japan. *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica*, 47: 135-141.

執筆: 日本植物分類学会

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):なし

被子植物ユキノシタ科

【維管束植物】

アマミチャルメルソウ

Mitella amamiana

カテゴリー判定基準:D

基礎情報

屋久島に産するヒメチャルメルソウに似るが、葉は長さ 1.7-2.9cm、幅 1.4-2.4cm、葉柄は長さ 3.3-6cm でヒメチャルメルソウより大きく、しばしば花弁を持つことで異なる。葉は円心形、鋭頭、両面に密に毛がある。花茎は長さ 6-10cm、1-3 花を総状につける。萼筒は長さ 2.3mm、萼裂片は 5 個。雄蕊は 5 個、花柱は 2 個。さく果は長さ 4.5mm、幅 5.6mm。

分布域・生息地・個体数の現況

自生地は小さな滝周辺の湿った崖であるため、局所的に伐採の影響を受けずに存続してきたものと思われる。2016 年の新種記載当時は、自生地周辺には開発計画はなく、自生地はアクセスが困難な場所にあるので、生育環境は安泰と思われていたが、2017 年になって自生地周辺に開発計画が持ち上がり、絶滅が危惧されている。

随時見直しの評価理由

アマミチャルメルソウは、2011 年に奄美大島在住の方が発見し、2016 年に新種記載されたごく小型の常緑多年草で、自生地はごく接近した 4 カ所に限られる。現在の推計では、成熟個体は 50 個体以下であり、幼若個体まで含めても総個体数 300 個体以下である。密に群生するが、個体が小さいので、最大の集団でも 1 m²以内であり、わずかな自生地の改変や採集、さらには自然遷移によっても容易に絶滅する可能性があるため、レッドリスト新規掲載が急務であると判断した。

存続を脅かす要因 土地造成(23) 道路建設(24) 産地局限(61)

参考文献

Okuyama, Y., 2016. *Mitella amamiana* sp. nov., the first discovery of the genus *Mitella* (Saxifragaceae) in the Central Ryukyus. *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica*, 67: 17-27.

執筆: 日本植物分類学会

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):なし

シダ植物メシダ科

【維管束植物】

ムシャシダ

Diplazium megaphyllum

カテゴリー判定基準:D

基礎情報

2018年に鹿児島県徳之島で発見された日本新産種。国外では中国・台湾・ベトナム・ミャンマーに分布する。根茎は明瞭に地上に立ち上がる。葉柄は長さ約40cm、淡緑色で基部では褐色を帯びる。鱗片は、基部では密に、上部ではまばらにつき、狭披針形～線状披針形、長さ約3-5mmで褐色、黒褐色の縁取り状の細胞があり、不規則な小突起を生じる。葉身は長さ60cm、幅45cm程度、卵状広披針形、紙質で緑色、表面は光沢がある。1回羽状複葉、6対前後の側羽片を持ち、上部20cm程度は頂羽片状になる。側羽片は最大のもので長さ25cm、幅6cm前後、長いもので1cm程度の柄を持つ。基部は切形～楔形、先端は鋭尖頭でやや尾状に伸び、鈍鋸歯縁。孢子嚢群は葉脈沿いにつき線形、長さ最大1cm前後、包膜に覆われる。

分布域・生息地・個体数の現況

現存する自生地は1地点で、約100㎡の範囲に成熟個体25個体が生育し、幼個体も見られることから孢子による繁殖が行われているものと考えられる。

随時見直しの評価理由

2018年に日本新産が確認・発表された種である。本種は産地・個体数とも限られているうえ、自生地の森林が伐採される可能性とともに、周辺の森林伐採により空中湿度の低下等の自生地環境の悪化が懸念され、絶滅が危惧される状況にあるため、レッドリスト新規掲載が急務であると判断した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 産地局限(61)

参考文献

海老原淳・森田秀一・山室一樹, 2018. 徳之島で発見された日本新産種ムシャシダ(メシダ科). 植物研究雑誌, 93: 404-406.

Tagawa, M., 1936. Miscellaneous notes on the East-Asiatic pteridophytes with special reference to the Japanese species (I). Journal of Japanese Botany, 12: 486-495.

執筆者: 日本植物分類学会

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019):EN

シダ植物オシダ科

【維管束植物】

シムライノデ

Polystichum shimurae

カテゴリー判定基準:D

基礎情報

レッドデータブック 2014(植物 I) p. 206.を参照。< https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/植物 I_204.pdf >

分布域・生息地・個体数の現況

基準産地の静岡県では近年確実な自生個体が報告されていない。神奈川県では古い標本記録があるが、現在自生個体は確認できない。確実に現存する自生地は東京都の1地点で、過去には約1haに少なくとも500個体程度が生育していた。しかし2017年頃からスギ林の伐採事業が実施され、2018年2月までに半数以上が消失したものと見積られる。残存個体は100個体程度であるが、その自生地の大半が今後の伐採予定地に含まれており、伐採予定地外に生育する株は10~20株程度と見積られる。10年以内の絶滅確率は50%以上と推定される。

随時見直しの評価理由

自生地におけるスギ林の伐採事業によって、既に半数以上の個体が自生地から失われたと推定されている。現状で確認されている成熟個体数が、今後継続する可能性の高い森林伐採によってさらに減少するリスクが高く、早急なカテゴリー変更の必要があると判断した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 産地局限(61)

参考文献

岩間理紀, 希少なシダ 壊滅的, 毎日新聞, 2018年8月16日, 夕刊, p. 9.

執筆者: 日本植物分類学会

アソサイシン

Asarum misandrum

カテゴリー判定基準:D

基礎情報

これまで中国東北部・朝鮮半島・極東ロシアに分布するケイリンサイシンであると考えられてきたものが、韓国南部で記載された種と同一でケイリンサイシンとは別種であることが判明し、新たにアソサイシンと和名がつけられた。萼筒は上下に押しつぶされたような扁球形で、径は 11.5~16mm、長さは径の半分ほど、萼口は広く開き、萼裂片は強く反り返る。

分布域・生息地・個体数の現況

国内での分布は熊本県のみで、阿蘇の限られた地域の草原に局限している。おもに草原から林縁にかけて生育しており、生育場所が1ヶ所であるうえ、匍匐するために見かけ上の成熟個体数よりも実際の個体数は少ない可能性が高く、成熟個体数は 250 個体未満であると考えられる。

随時見直しの評価理由

園芸採取のほか、今後の管理放棄による植生遷移、牧野改良、人工造林等の影響により絶滅が危惧される状況にある。

存続を脅かす要因

草地開発(16) 園芸採取(41) 管理放棄(53) 自然遷移(54) 産地局限(61)

参考文献

Yamaji, H., T. Nakamura, J. Yokoyama, K. Kondo, T. Morota, S. Takeda, H. Sasaki, M. Maki, 2007. A taxonomic study of *Asarum* sect. *Asiasarum* (Aristolochiaceae) in Japan. *Journal of Japanese Botany*, 82: 79-105.

執筆: 日本植物分類学会

【蘚苔類】

■補遺資料掲載種一覧

和名		学名		RL カテゴリ	
RL2019(旧)	RL2020	RL2019(旧)	RL2020	2019	2020
オオミズゴケモドキ	削除	<i>Pleurozia gigantea</i>	削除	CR+EN	削除

削除

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): CR+EN

ミスゴケモドキ目ミスゴケモドキ科

【蘚苔類】

オオミズゴケモドキ

Pleurozia gigantea (F.Weber) Lindb.

削除理由

国内での本種に関する報告は、Thiers (1993)による屋久島産の標本[Hepaticae Japonicae, ser. 4, no. 188: *Pleurozia giganteoides* Horikawa, July 1951, leg. Amakawa (NY)]を基にしたものに限られていたが、標本の再確認が行われ、標本にはオオミズゴケモドキ *Pleurozia gigantea* (F.Weber) Lindb.は含まれておらず、この報告が間違いであることが判明した。また、度重なる現地調査においても生育が確認できないことから、本種は日本には生育しないという結論に至り、片桐・古木(2018)において本種を日本のフロラから除外することが提案・報告されたため。

参考文献

片桐知之・古木達郎, 2018. 日本産タイ類・ツノゴケ類チェックリスト. *Hattoria*, 9: 53-102.

執筆者: 古木達郎(千葉中央博物館)

【地衣類】

■補遺資料掲載種一覧

和名		学名		RL カテゴリ	
RL2019(旧)	RL2020	RL2019(旧)	RL2020	2019	2020
—	ハクテンヒメキウメノキゴケ	—	<i>Flavopunctelia flaventior</i>	—	CR
—	ヨコタカラタチゴケ	—	<i>Ramalina yokotae</i>	—	CR

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし

チャシブゴケ目ウメノキゴケ科

【地衣類】

ハクテンヒメキウメノキゴケ

Flavopunctelia flaventior (Stirt.) Hale

カテゴリー判定基準: D

基礎情報

地衣体は葉状、直径 9cm ほどに達し、背面は灰緑色、腹面は中心部が黒色で周縁部が暗褐色、偽根が散生する。裂片は幅 5-11mm でやや丸みを帯びる。髄層は白色。偽盃点は明瞭で、類円形から伸長する(～1.3mm)。粉芽塊は地衣体背面と周縁に生じ、穀粉状から顆粒状。子器は日本では見つかっていない。含有成分としてウスニン酸とレカノール酸を有する。本種は温帯から寒帯および熱帯地域の高所などに広く分布していることが知られている。

分布域・生息地・個体数の現況

日本においては、北海道では標高約 40 m のソメイヨシノ上、長野県では標高 1100 ～1375 m のモミ、クリ、カラマツ、アカマツ、ダケカンバ、サクラ属などの樹皮上から採集されている。

随時見直しの評価理由

ハクテンヒメキウメノキゴケは、絶滅危惧 II 類(VU)にランクされているヒメキウメノキゴケの近縁種であり、国内の分布域も重なる。しかし、現地調査ではヒメキウメノキゴケよりも個体数が少ないために発見が難しい。したがって、さらに希少性が高く、国内での生育が脅かされていると考えられるため見直しを提案した。

存続を脅かす要因

森林伐採(11) 局所分布(61)

参考文献

Moon, K.H., Y. Ohmura, H. Kashiwadani and K. Yoshida, 2013. Materials for the Distribution of Lichens in Japan (20) *Flavopunctelia flaventior* and *F. soredica*. *Journal of Japanese Botany*, 88: 258-260.

執筆: 大村嘉人(国立科学博物館)

CR

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): なし

チャシブゴケ目カラタチゴケ科

【地衣類】

ヨコタカラタチゴケ

Ramalina yokotae Kashiw. & K. H. Moon

カテゴリー判定基準: B-1,2, D

基礎情報

地衣体は樹枝状、直径 10cm ほどの半球状で枝は同長 2 又分枝をくりかえして伸長する。枝は幅 0.7-1.5mm、中空、所々に孔があり、内髄の菌糸は軟骨組織に密着する。粉芽や裂芽はない。子器は見つかっていない。主成分としてノルスチクチン酸を含む型とノルスチクチン酸とセッカ酸の両方を含む型の二つの種内化学変異がある。本種は日本固有種とみられ、国内では鹿児島県徳之島だけに生育する。

分布域・生息地・個体数の現況

徳之島では天城町の「犬の門蓋」(標高 10-14m)のコウライシバと混生する。生育地は北向きの傾斜地に限られ、20×50m ほどの場所に約 40 集団が生育している。もう一カ所の生育地は犬の門蓋の南方約 600m に位置する隆起石灰岩上約 1.5×3m の場所に径 7cm 以下の小さな集団が約 5 集団生育している。隆起石灰岩上にコウライシバが生育する環境は南西諸島でしばしば見られるが、これまで発見された場所は徳之島の中の上記地点に限られ、南西諸島を含む日本の他の地域からは見つかっていない。

随時見直しの評価理由

ヨコタカラタチゴケは 2017 年に徳之島から記載された新種である(Kashiwadani & Moon 2017)。本種は徳之島の隆起石灰岩上に生育するコウライシバ群落中に生育する樹枝状地衣類である。これまでに見つかっている生育地は徳之島だけであり、集団数(コロニー数)も 50 点以下と希少である。生育地が島の景勝地内で観光客が自由に散策できる場所にあることから、踏みつけの影響を受けて種の生育が脅かされていると考えられるため見直しを提案した。

存続を脅かす要因

人の踏みつけ(51) 局所分布(61)

参考文献

Kashiwadani, H. and K.H. Moon, 2017. Two new species of *Ramalina* (Ascomycotina: Ramalinaceae) from the Nansei Islands, Japan. *Journal of Japanese Botany*, 92: 27-33.

執筆: 柏谷博之(国立科学博物館)

【菌類】

■補遺資料掲載種一覧

和名		学名		RL カテゴリ	
RL2019(旧)	RL2020	RL2019(旧)	RL2020	2019	2020
アカダマスツポントケ	アカダマスツポントケ	<i>Phallus hadriani</i>	<i>Phallus hadriani</i>	CR+EN	EN
ヤチヒロヒダタケ	ヤチヒロヒダタケ	<i>Desarmillaria ectypa</i>	<i>Desarmillaria ectypa</i>	CR+EN	VU
カバイロチャダイゴケ	カバイロチャダイゴケ	<i>Cyathus badius</i>	<i>Cyathus badius</i>	EX	DD
シンジュタケ	削除	<i>Boninogaster phalloides</i>	削除	CR+EN	削除

EN

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): CR+EN

スッポンタケ目スッポンタケ科

【菌類】

アカダマスッポンタケ

Phallus hadriani Vent.

カテゴリー判定基準: B-1, 2

基礎情報

レッドデータブック 2014(植物 II) p. 540.を参照。<https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/菌類_066.pdf>

分布域・生息地・個体数の現況

北海道石狩市、斜里町および新潟県長岡市の、ハマニンニク、コウボウムギやハマニガナなどの海浜植物が繁茂する海浜砂丘に分布する。

随時見直しの評価理由

本種は、第4次レッドリスト公表後の調査が進展した結果、生息状況の変化が確認されたので、今年度随時見直しにおいて量的に評価した。本種は北日本の良好な海浜植生が残る砂浜海岸のみに局所的に発生し、海岸開発等の生息環境の悪化により依然として絶滅のおそれがあるものの、北海道と新潟県で新たな生息地が発見されたことから、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

海岸開発(14)

参考文献

糟谷大河・竹橋誠司・山上公人, 2007. 日本から再発見された3種のスッポンタケ属菌. 日本菌学会会報, 48: 44-56.

糟谷大河・内田暁友・保坂健太郎, 2015. 北海道東部の海浜から新たに発見されたアカダマスッポンタケ. 知床博物館研究報告, 37: 13-19.

糟谷大河・丸山隆史・布施公幹・保坂健太郎・箕輪一博, 2016. 新潟県の海浜より再発見されたアカダマスッポンタケ. 柏崎市立博物館館報, 30: 97-104.

執筆: 糟谷大河(慶應義塾大学)

VU

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): CR+EN

ハラタケ目キシメジ科

【菌類】

ヤチヒロヒダタケ

Desarmillaria ectypa (Fr.) R.A. Koch & Aime

カテゴリー判定基準: B-1, 2

基礎情報

レッドデータブック 2014(植物 II) p. 530.を参照。

<https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/菌類_056.pdf>

レッドリスト 2020 は第4次レッドリストの改訂版であることからここではキシメジ科としているが、近年の分類体系に基づく本種はタマバリタケ科に所属する。

分布域・生息地・個体数の現況

既存の生息地は青森県青森市、五所川原市、六ヶ所村、新潟県上越市、群馬県尾瀬、京都府八丁平である。本種は北日本あるいは冷涼な地域の湿原に限定して発生するが、このような環境は開発、植生遷移による乾燥化や温暖化等で減少傾向にある。

随時見直しの評価理由

本種は、第4次レッドリスト公表後の調査が進展した結果、生息状況の変化が確認されたので、今年度随時見直しにおいて量的に評価した。本種は北日本あるいは冷涼な地域の湿原に限定して発生し、開発等の生息環境の悪化により依然として絶滅のおそれがあるものの、既知の産地に加え、新潟県で新たな生息地が発見されたことから、随時見直しにおいて評価した。

存続を脅かす要因

湿地開発(15)

参考文献

糟谷大河・丸山隆史・布施公幹・保坂健太郎・箕輪一博, 2017. 新潟県で新たに発見された湿原生きのこ、ヤチヒロヒダタケ *Desarmillaria ectypa*. 柏崎市立博物館館報, 31: 99-108.

工藤伸一・長沢栄史, 2003. 青森県で再発見されたヤチヒロヒダタケ *Armillaria ectypa* について. 菌蕈研究所研究報告, 41: 26-34.

Svetasheva, T, 2015. *Armillaria ectypa*, The IUCN Red List of Threatened Species 2015: e.T75097245A75098379. <http://dx.doi.org/10.2305/IUCN.UK.2015-4.RLTS.T75097245A75098379.en>. Downloaded on 20 September 2018.

執筆: 糟谷大河(慶應義塾大学)

DD

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): EX

ハラタケ目チャダイゴケ科

【菌類】
日本固有種

カバイロチャダイゴケ

Cyathus badius Kobayasi

カテゴリー判定基準: a), b)

基礎情報

レッドデータブック 2014(植物 II) p. 497.を参照。<https://ikilog.biodic.go.jp/rdbdata/files/envpdf/菌類_023.pdf>

分布域・生息地・個体数の現況

小笠原諸島母島船木山において、2015年11月の調査で1標本(複数子実体)が採集されたのが、唯一の再発見例である。タイブローカリティ(父島清瀬、1936年)を含め、その他の地域では発生が確認されていない。タイブローカリティは現在おもに住宅地になっていることから、存続をおびやかす要因として土地造成、道路建設による発生適地の減少が考えられる。しかし、母島の新規発生地はリュウキュウマツ混じりの広葉樹林であり、同じような環境は小笠原諸島全域に広く分布する。

随時見直しの評価理由

本種は1936年に小笠原諸島父島清瀬で採集されて以来、その後の発見例がなく、「絶滅(EX)」とされてきた。しかし最近の調査において、母島で本種が発生することが確認された(Cruz et al. 2018)。しかし、母島における1地点を除くと、父島のタイブローカリティを含め、再発見はされていない。本種が絶滅種でないことは明らかであるが、現状で確認されている発生地点が1地点のみ(母島船木山)であることから、絶滅の危機に瀕している可能性は高い。定量的要件に基づくだけのデータに乏しく、また定性的要件に基づくための集中的な調査が不足していることから、現状では本種をEXからDDに移行し、今後の調査対象種とするのが妥当である。

存続を脅かす要因

土地造成(23) 道路建設(24) 局所分布(61)

参考文献

Cruz, R.H.S.F., I.G. Baseia and K. Hosaka, 2018. Rediscovery of *Cyathus badius*, an 'extinct' species from the Bonin Islands, Japan. *Mycoscience*, 59: 193-199.

執筆者: 保坂健太郎(国立科学博物館)

削除

旧カテゴリー(レッドリスト 2019): CR+EN

メラノガステル目メラノガステル科

【菌類】
日本固有種

シンジュタケ

Boninogaster phalloides Kobayasi

削除理由

本種は小笠原諸島の広い地域で確認されており、父島全域(計3地点)、母島全域(8地点)、兄島から計60標本以上が採集されている。特に母島においては2010年以降、毎年複数標本が採集されており、子実体が頻繁に発生することが示唆されている。また、基質特異性は低いことも示唆されており、小笠原諸島固有植物であるタコノキだけでなく、その他さまざまな広葉樹・針葉樹(移入植物であるリュウキュウマツ)・単子葉植物(タケ・ササ類)の落葉・落枝・球果等に発生することが確認された。よって本種が絶滅の危機に瀕しているとは考えられず、本種はレッドリストのランク外へ位置付けることが妥当である。なお、レッドリスト2020は第4次レッドリストの改訂版であることからここではメラノガステル目メラノガステル科としているが、近年の分類体系に基づく本種はヒメツチグリ目スクレロガステル科に所属する。

参考文献

Hosaka, K., 2014. Phylogenetic analyses of a truffle-like genus, *Boninogaster*, from Hahajima Island, the Bonin Islands, Japan. *Bulletin of the National Museum of Nature and Science series B*, 40: 61-67.保坂健太郎, 2018. 小笠原諸島および周辺地域に分布するきのこ類(担子菌門ハラタケ亜綱)の分布情報. *国立科学博物館専報*, 52: 17-37.Hosaka, K., T. Kasuya, T. Orihara and K. Nam, 2015. Endangered or not? A case study of presumably threatened species of truffle-like fungi from the oceanic islands in Japan. *Abstract of Asian Mycological Congress*, 103.

執筆者: 保坂健太郎(国立科学博物館)

環境省レッドリスト 2020 補遺資料

令和2年3月

編集・発行 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室